Grand Design of Kashihara City -DRAFT-

橿原市 まちづくりグランドデザイン素案

4. 橿原市まちづくりグランドデザイン素案

ご挨拶

このたび、30年後を見据えたまちづくりの方向性を示す「橿原市まちづくりグランドデザイン素案」を策定しました。

本市は、昭和31年（1956年）の市制施行以来、大都市近郊の住宅都市として発展し、奈良県内でも有数の人口規模を有する都市へと成長してまいりました。また、橿原神宮や藤原宮跡、重要伝統的建造物群保存地区「今井町」をはじめとする豊かな歴史文化資源に恵まれるとともに、交通の要衝として鉄道や道路網が整備されるなど、歴史と都市機能が調和したまちとして歩みを重ねてきました。

一方で、人口減少や少子高齢化の進行は全国的な課題となっており、デジタル化や技術革新の急速な進展、さらには気候変動や脱炭素社会への対応など、社会環境は大きく変化しています。とりわけ、国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によれば、これからの30年は人口減少が進む時期であり、本市の将来にとって大きな転換点となることが見込まれています。また、市制施行70周年という節目を迎えた今、30年後の市制100周年を見据え、その時代にふさわしいまちの姿を今から描いておくことが重要です。公共施設等総合管理計画など2055年度を一つの目標年次としている計画もあり、今まさに、将来を見据えたまちの姿を描き、その実現に向けた方向性を定めることが重要な時期を迎えています。こうした状況を的確に見据え、将来にわたって持続可能なまちづくりを進めるため、長期的な視点に立った都市の将来像を描くこととしました。

本グランドデザイン素案では、市の木である「橿（かし）の木」をまちづくりの象徴とし、その橿を本市の成長に例え、「日本国はじまりの地」から新たな未来を切り拓く都市の姿を描いています。常緑で力強く成長する橿の木々が杜を形づくるように、人や活動のつながりを広げながら、多様なにぎわいと交流が生まれるまちを育んでいくことを目指すものです。その実現に向けて、「橿の杜」をイメージした共創の仕組みづくり、多様なにぎわいの創出、まちをつなぐネットワークの形成、持続的な成長を支える仕組みづくりの4つのまちなか戦略を掲げています。

今後は、本グランドデザイン素案を基礎とし、世界遺産登録への取組や医大新駅周辺のまちづくりなど、本市で推進する重要プロジェクトの動向を踏まえるとともに、有識者のご意見やワークショップ・パブリックコメント等における市民意見の傾聴に努めていきます。また、将来のまちの姿をより分かりやすく発信するため、コンセプトブックや動画などを活用した周知活動も進めてまいります。

本グランドデザイン素案を羅針盤として、これからも市民の皆様とともに30年後の橿原の未来を見据え、次の世代に誇れるまちづくりに全力で取り組んでまいります。

令和8年3月

橿原市長　亀田忠彦

4. 橿原市まちづくりグランドデザイン素案

はじめに

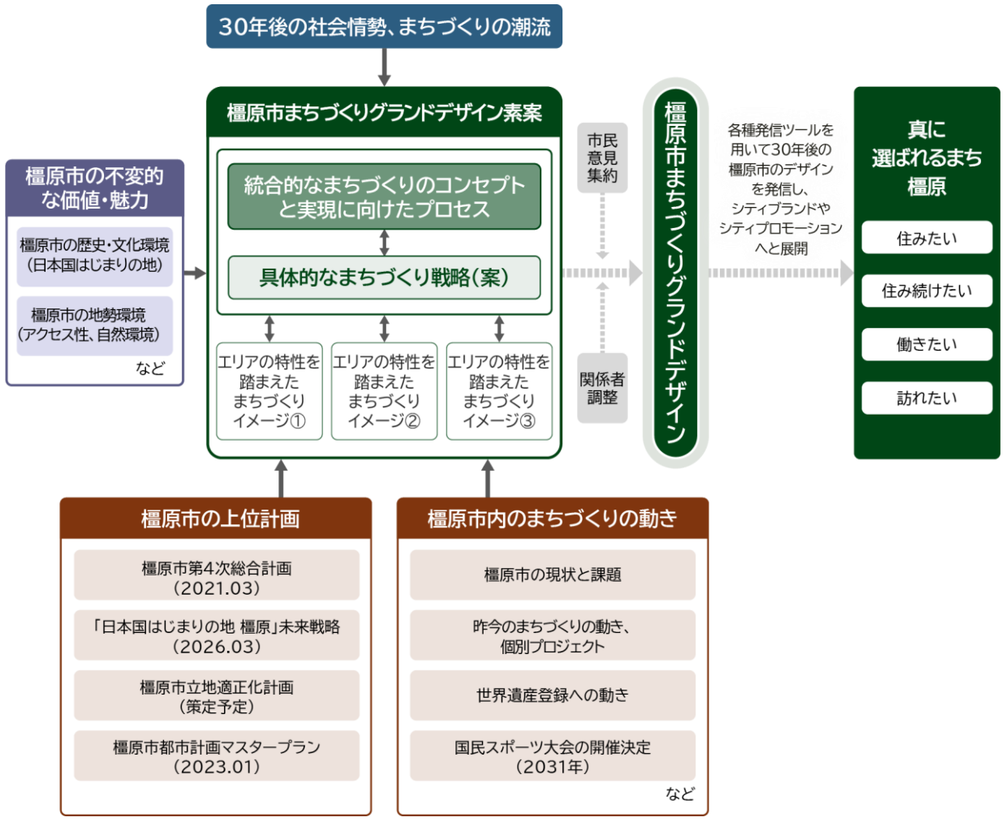
橿原市まちづくりグランドデザイン素案の位置づけ

橿原市まちづくりグランドデザイン素案（以下「本グランドデザイン」という。）は、急速に変化する社会情勢を踏まえながら、30年後の未来社会を想像し、本市の理想の姿とその実現へ向けた手法やプロセスを描いた、まちづくりの戦略的なビジョンです。激化する都市間競争の中で「住みたい」「住み続けたい」「働きたい」「訪れたい」といった、「真に選ばれるまち」となるために、本グランドデザインが、市民の皆様、市外からの移住希望者や観光客、事業者に対して、本市のまちの不変的な地域資源（歴史・自然・文化）を基盤に、さらなる魅力を創出発信していくシティブランド、シティプロモーションの役割を果たす重要なものです。

また本グランドデザインは、現在の上位計画を踏襲しながら、市内で検討・推進されている様々なプロジェクトや個別施策を横断的に捉え、それらの連携とその相乗効果の最大化を図ることを目指しています。各分野・各エリアの特性と整備方針を横断的に統合しつつ、30年後の橿原の将来像を示すもので、これから実際に検討が進められる具体的な計画や事業内容を規定するものではありません。

今後、本グランドデザインについては、本市で進められているプロジェクトの状況を織り込みつつ、有識者の知見や市民の皆様のご意見を伺っていく予定です。

※この素案に掲載しているイメージパースは、「30年後の橿原市」という未来を示すもので、現在検討が進められている具体的な計画や事業内容を規定するものではありません。



目次

はじめに

1. 計画の背景
1−1　社会情勢 …… 1
1−2　まちづくりのトレンド・キーワード …… 3
1−3　橿原市の歴史・文化環境 …… 5
1−4　橿原市の地勢環境 …… 7
1−5　橿原市の現状と課題 …… 9
1−6　橿原市の上位計画 …… 13
1−7　市内のまちづくり …… 16
1−8　背景のまとめ …… 17
1−9　真に選ばれるまちとは …… 18
1−10　まちなか戦略エリアの設定 …… 19

2. まちづくりコンセプト
2−1　まちづくりグランドデザインのコンセプト …… 21
2−2　橿原市における30年後のライフスタイル …… 23

3. 4つのまちなか戦略
まちなか戦略 1　「橿の杜」を共創する仕組みづくり …… 25
30年後に向けて目指すべき「将来ビジョン」を共有する
「橿の杜のまちづくり」の実現に向けた公民連携の体制づくり
市民参画・協働を促す多様な機会の提供
小さなアクションを実証・試行しながら進めるまちづくり
まちなか戦略 2　多様な「にぎわいの杜」づくり …… 27
橿原市からはじめる「ウォーカブル+（プラス）」なまちづくり
多様なステークホルダーが集う、まちづくりとコミュニティの交流拠点
駅を中心とした居心地がよく歩きたくなる「駅まちウォーカブルエリア」
駅まちウォーカブルエリアの設定
まちなか戦略 3　杜と杜をつなぐ有機的・多層的なネットワークづくり …… 35
有機的・多層的な都市構造の構築
ウォーカブル+が拡大する回遊ネットワーク
分野を横断する回遊ネットワーク「ランブリング・プロムナード」
回遊を促進するデジタルプラットフォーム
広域回遊ネットワーク連携
まちなか戦略 4　「橿の杜」を持続的に成長させるエコシステムづくり …… 39
市民の活躍の場づくり
新たな活動や価値を生み出す仕組みづくり
新たな魅力人材の呼び込み・育成による橿原市のさらなる活性化
橿原市の「人」の魅力の発信

4. 選ばれるまち 橿原市 …… 43

資料編 …… 46

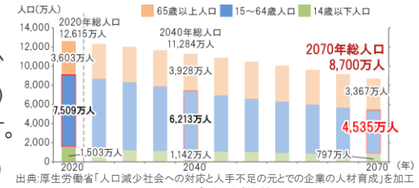
1. 計画の背景

1-1 社会情勢

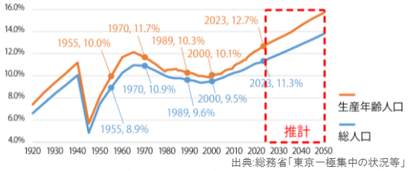
- 国全体で人口減少が進み、都市機能や生活基盤サービスの持続性などが課題となっています。
- 人々はモノや便利さだけでなく心身の豊かさや自分らしい体験を求め、地域との関わり方も多様化しています。
- 情報通信技術の急速な発展により、AIやビックデータなどの先進技術が実装され、行政サービスや日常生活における効率化や最適化が進んでいます。

人口減少と少子高齢化の進行

- 日本の総人口は、2008年の1億2,808万人をピークに減少が続いており、国立社会保障・人口問題研究所（令和5年推計）によると、2070年には約8,700万人まで減少する見通しです。
- 少子高齢化と生産年齢人口（15歳以上65歳未満の人口）の減少により、地域経済の縮小や公共交通・商業などの生活基盤サービスの維持が困難になることが懸念されます。
- 総人口・生産年齢人口の東京圏への集中が継続すると予測されており、東京圏以外でも暮らしやすいまちづくりが求められています。



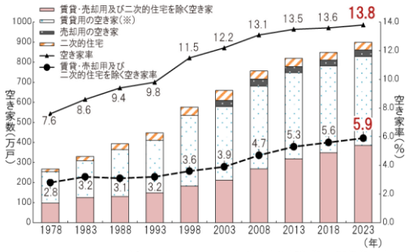
出典:厚生労働省「人口減少社会への対応と人手不足の元とでの企業の人材育成」を加工
人口減少の推移



出典:総務省「東京一極集中の状況等」
総人口・生産年齢人口に占める東京都シェア推移

転換を求められる都市経営

- 急速な都市化で拡大した市街地では、人口減少に伴う空き地・空き家の増加で「都市のスポンジ化」が進行しています。
- スポンジ化に伴う生活サービスや公共交通の縮小により、移動の利便性低下やにぎわいの喪失が懸念されます。また、老朽化が進むインフラの維持管理なども困難になりつつあり、持続可能な都市経営への転換が求められています。
- 拡大・成長を前提とした従来の都市計画から、質的向上と効率性を重視する都市経営への転換が必要です。



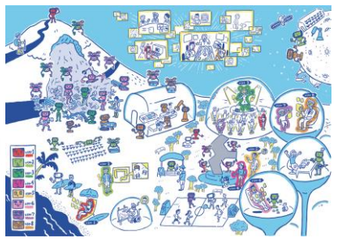
出典:令和5年住宅・土地統計調査住宅数概数集計(速報集計)結果
空き家数及び空き家率の推移-全国(1978年～2023年)

デジタル化と技術革新の進展

- 第四次産業革命と言われる、情報通信技術の急速な発展やAI・IoT・ビッグデータなど先進技術の社会実装により産業構造が変化し、行政サービス、日常生活などあらゆる分野で効率化・最適化・連携が進んでいます。
- 都市運営においても、交通・エネルギー・防災などの分野でデータを活用したスマートシティの取組が広がり、限られた資源で質の高いサービス提供が可能となっています。

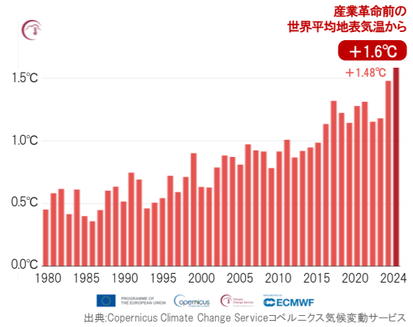
Society5.0とBeyond SDGs

- 日本は、IoT・AI・ビッグデータによって経済発展と社会課題解決を両立する社会"Society5.0"の実現を掲げています。さらに2050年を見据えた「ムーンショット」計画では、人が身体・空間・時間の制約から解放される社会など、革新的な目標に挑戦しています。
- 国際的にはSDGsの目標年限である2030年の先を見据えた「Beyond SDGs」の議論が始まっており、便利さだけでなくより深く人間の幸福や福祉に焦点があてられたSWGs（Sustainable Well-being Goals：持続可能な幸福目標）が次の目標として有力視されています。また、技術革新を誰もが豊かに暮らせる社会づくりに活かす視点が求められています。


出典:内閣府HP

気候変動と脱炭素社会への対応

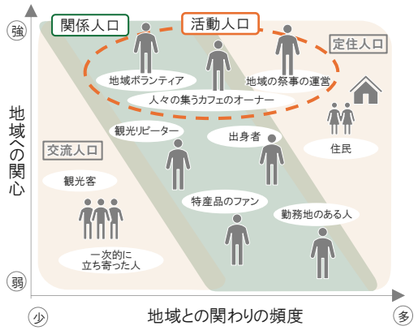
- WMO（世界気象機関）によると、世界の平均気温は産業革命前より約1.6℃上昇しています。豪雨災害などの極端な気象現象のリスクが高まっており、日本でも近年、記録的な豪雨が頻発しています。
- 日本は2050年カーボンニュートラルを宣言し、温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指しています。エネルギー転換や再生可能エネルギーの導入拡大など、脱炭素に向けた取組が拡大しています。
- 生物多様性の損失を止め回復させる「ネイチャーポジティブ」の考え方が国際的に広がっており、自然環境の保全や地域固有の生態系・文化的資源を守り活かすまちづくりが求められています。



出典:Copernicus Climate Change Serviceコペルニクス気候変動サービス
世界平均地表気温の産業革命前からの気温差

ライフスタイルの多様化と関係人口・活動人口の拡大

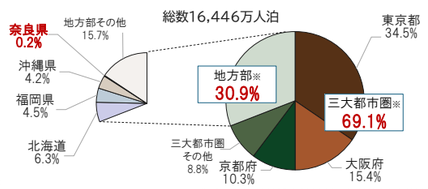
- 国土交通省の調査では、テレワーカーが全国就業者の約25%を占めており、柔軟な働き方が定着していることが示されています。
- 働き方改革やリモートワークの普及によって多拠点居住が可能になる中、都市と地方の環境のそれぞれに魅力を感じる人が増え、行き来する人々が増加しています。
- このような変化に伴う「交流人口」（一時的に訪れる人々）や「関係人口」（特定地域に関わる人々）の拡大は、地域経済の活性化や担い手確保につながります。また近年は、「活動人口」（地域の社会・経済活動や地域の魅力に関心を持って継続的に関わる人々）の確保も、新たな地域活性化の可能性として着目されています。



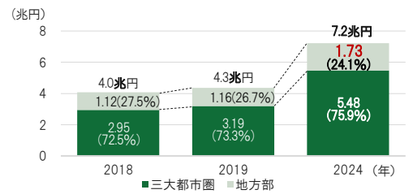
観光産業の拡大と持続可能性の両立

- インバウンドの拡大により観光産業の重要性が高まり、地域独自の資源を生かした地方創生への貢献が期待されています。外国人延べ宿泊者数の約7割は三大都市圏※に集中しており、奈良県は全体の0.2%に留まっていますが、今後は地方部※へも宿泊・訪問の広がりが見込まれています。
- 観光客が特定地域に過度に集中する「オーバーツーリズム」が課題となり、マナー違反や交通混雑、自然環境・住民生活への影響などの問題が深刻化しています。
- 観光庁の「第5次観光立国推進基本計画（2026年策定予定）」の新たな目標でも観光と住民生活の質の確保との両立が挙げられており、持続可能な観光モデルに取組んでいる地域が大幅に拡大される予定です。

※三大都市圏：埼玉、千葉、東京、神奈川、愛知、京都、大阪、兵庫の8都府県
　地方部　　：三大都市圏以外の道県（いずれも観光庁の定義に基づく）



出典:宿泊旅行統計調査（2024年・年間値（確定値））
外国人延べ宿泊者数（都道府県別、2024年）

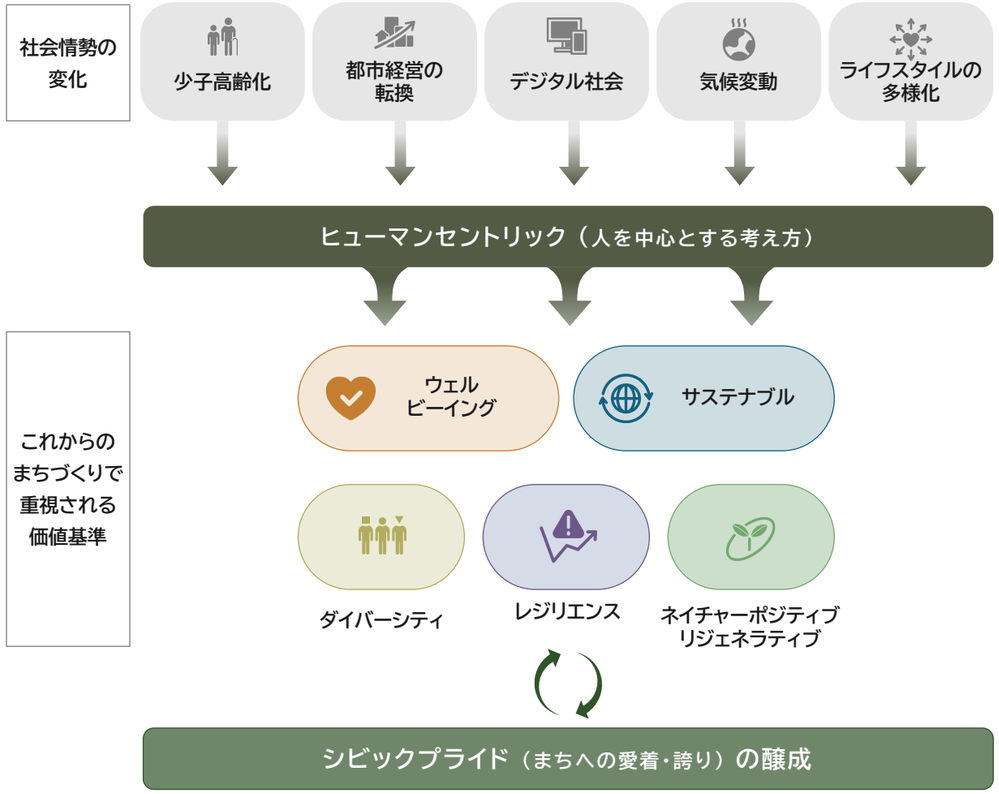


出典:インバウンド消費動向調査2024年暦年(確報)
三大都市圏・地方部※別にみる
訪日外国人旅行消費額の推移

1-2 まちづくりのトレンド・キーワード

社会情勢の変化とまちづくりにおいて重視される価値基準の関係

- 近年、社会を取り巻く情勢は急激に変化しており、まちづくりにおいて重要視される「価値基準」についても、「人々の幸福や豊かな暮らしを中心とする考え方（ヒューマンセントリック）」に立っているか、という視点が求められます。
- 地域の人々の価値基準が実現されると、その人々が関係するまちへの愛着や誇り（シビックプライド）が醸成され、地域外の人々にとってもまちの魅力や価値が高まって、住みたい、訪れたい、働きたいといった「選ばれるまち」となっていきます。まちづくりの価値基準の実現と、シビックプライドの醸成は、相互に関連性を有していると言えます。



- ウェルビーイング …心も体も元気で、社会的なつながりの中で自分らしく豊かに過ごせる、満足度の高い状態。
- サステナブル …環境、社会、経済が、今だけでなく、将来の世代にとってもよい状態で持続していけること。
- ダイバーシティ …年齢や性別、国籍、障がいの有無などさまざまな違いを当たり前のものとして尊重し合い、誰も取り残さない環境を整えること。
- レジリエンス …災害や感染症、経済の変化などの困難な状態に直面しても、被害を小さくし、早く立て直せる耐久力や回復力、再起力のこと。
- ネイチャーポジティブ リジェネラティブ …ネイチャーポジティブ：自然をこれ以上減らさず、むしろ増やしていこうという考え方。自然再興。リジェネラティブ：壊れた自然などを元に戻すだけでなく、前より良くしていこうという考え方。

価値基準の実現のためのまちづくり手法

- 人を中心とした考え方を踏まえた価値基準の実現のために、近年のまちづくりの動向として、以下のような手法が用いられています。
- 「ウェルビーイング」と「サステナブル」を実現することで、「ダイバーシティ」「レジリエンス」「ネイチャーポジティブ/リジェネラティブ」の実現にもつながります。

【まちづくり手法】			【内容】	【実現される価値基準】				
				ウェルビーイング	サステナブル	ダイバーシティ	レジリエンス	ネイチャーポジティブ
意思決定	官民連携		自治体と民間企業が連携・協働して物事を実施する	―	―	―	―	―
意思決定	ボトムアップ		現場から意見やアイデアを吸い上げる手法 民間主導、市民参画などを含む ⇔トップダウン	―	―	―	―	―
都市構造	コンパクトプラスネットワーク		居住や生活機能を都市中心部に集約し、それらを公共交通機関などで結ぶまちのあり方	○	○	○		
都市構造	ミクストユース		異なる用途機能を集約・融合した空間のあり方	○	○	○		
都市構造	ウォーカブル		安全・安心・快適に歩ける、歩きたくなる空間のあり方	○	○	○		
アプローチ	ソフトアーバニズム		人々の活動やコミュニケーションを重視し、空間の居心地をよくしようとする考え方	○	○	○	○	
アプローチ	ソフトアーバニズム	タクティカルアーバニズム	小規模、短期間、低コストで実践しやすくする手法 社会実験、暫定利用、ポップアップなど	○				
アプローチ	ソフトアーバニズム	プレイスメイキング	地域市民や利用者主体で場を育て、居心地のよい場所をつくろうとする手法	○		○		
アプローチ	ソフトアーバニズム	エリアマネジメント	市民や民間事業者が主体となって地域価値を向上しようとする手法	○	○		○	
アプローチ	スマートシティ		デジタルを掛け合わせてさまざまな課題を解決するまちのすがた	○	○	○	○	
アプローチ	スマートシティ	デジタルツイン	仮想再現によって施策を検証する手段	○	○		○	
アプローチ	スマートシティ	オープンデータ	データの公開と活用によって、あらゆるものの相互連携を図るための手段	○		○		
アプローチ	スマートシティ	MaaS	テクノロジーの活用により移動を最適化する手段	○		○		
アプローチ	カーボンニュートラル		温室効果ガスの排出と吸収を差し引きゼロにすること	○	○	○	○	○
アプローチ	カーボンニュートラル	グリーンインフラ	インフラに自然環境が持つ多様な機能を活用すること	○	○		○	○
アプローチ	カーボンニュートラル	エネルギーマネジメント	関連するデータを収集分析し、エネルギー使用の最適化や効率的な利用を促進すること		○		○	○
アプローチ	カーボンニュートラル	移動手段の転換	自動車移動への依存を減らすアプローチ	○	○	○	○	○
アプローチ	カーボンニュートラル	都市の木質化	循環型資源の木材を用いてまちを整備するアプローチ		○			○
アプローチ	経済情勢に応じたまちづくり			○	○	○	○	
アプローチ	経済情勢に応じたまちづくり	地域経済の活性化	地域内の雇用・生産・消費活動を高めるため、地域内の資源を活用すること。地産地消や地域ブランド開発など	○	○		○	
アプローチ	経済情勢に応じたまちづくり	不動産シェアリング/サブスクリプション	所有せずに不動産を利用できる手法。使っていない資産を他者と共有したり、定額料金で利用することが可能	○	○	○		
アプローチ	経済情勢に応じたまちづくり	既存ストックの活用	既存の建物を活用し資源を有効活用するアプローチ リノベーション、コンバージョンなど	○	○		○	

1-3 橿原市の歴史・文化環境

- **藤原宮跡や今井町重要伝統的建造物群保存地区といった歴史・文化遺産、大和三山の歴史的自然景観など、本市は唯一無二の不変的価値を形成しています。**
- **「飛鳥・藤原の宮都」の世界遺産登録により、観光・交流拠点として更なる成長が期待されます。**

集落の形成と建国の伝承(古代)

縄文晩期の西日本を代表する「橿原遺跡」

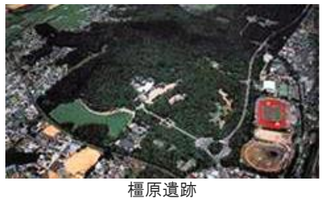
- 全国各地の土器が多数出土する、縄文晩期を代表する大規模集落跡。国家形成の前から、各地の人・物・情報が集まる地域間交流の要所であったと思われます。

建国伝承の地「橿原宮」

- 「日本書紀」に神武天皇が橿原宮で即位したとの記述があり、ここから日本の国が始まったと伝承されています。

総数約600基からなる日本を代表する群集墳「新沢千塚古墳群」

- 4世紀末～6世紀末の国内最大級の群集墳。ペルシャや大陸由来の国際色豊かな副葬品が出土しており、古代橿原の地はシルクロードを通じて世界と繋がっていたと考えられます。


橿原遺跡

新沢千塚古墳群

はじめての都市(古代)

日本初の本格的都城「藤原京」

- 694年に遷都された藤原京は、日本で初めて条坊制(碁盤の目状の区画)を敷いた本格的な都城です。当時の道路網の骨格や景観の設計思想などは、現在の市街地形成にも影響を与えています。

藤原京の写真

政治・文化の拠点(中世)

大和の戦略的拠点「十市城」

- 寺川右岸の自然堤防上に築かれた中世の平城で十市氏の居城で、大和の政治の中心のひとつであったと考えられています。
- 遺跡からは、中国製の白磁碗、青磁碗・盤や高麗(こうらい)製の青磁壷などが出土しており、政治の拠点としてだけではなく、文化交流の場であったとも考えられています。

十市城跡

商業・交通と自治の拠点(中近世)

「海の堺、陸の今井」と称された経済都市:今井町

- 寺内町から発展し、「大和の金は今井に七分」と言われるほどの富を蓄積して栄えた今井町は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。

大阪や伊勢を結ぶ幹線道路の交通の要所:八木

- 古代からの主要幹線道路である「横大路」や「下ツ道」が交わる地点(札ノ辻)を交点として、多くの人々や物資が行き交いました。

今井町

橿原神宮の創建～建国の記憶(近代)

明治23年(1890)に神武天皇が即位された地に創建された神宮

紀元二千六百年事業

- 神武天皇即位2600年にあたる昭和15年(1940)に奉祝記念事業として、社殿の修築、境域と神武天皇陵の拡張整備、駅舎や線路の移設などが実施され、延121万人の建国奉仕隊が組織されました。
- 境域内の造園・植栽は、明治神宮の森づくりにも関わった林学者・本多静六らの手法により、100年先を見据えた計画的な「鎮守の森(社叢林(しゃそうりん))」が計画され、郷土の木をもって構成することとし、橿原の地名から昔はカシの木が生い茂っていたことが発掘調査により推測されることから、カシ類を主として、昔の姿に還元することが目指されました。2040年には「紀元2700年」の節目を迎えます。

橿原神宮

世界遺産登録～「飛鳥・藤原の宮都」(未来へ向けた歴史的価値の継承)

歴史的価値

- 「飛鳥・藤原の宮都」は東アジアの古代国家形成期において、中央集権体制が誕生・成立した過程を、2つの連続する時代の宮都の変遷から示すことができる唯一無二の資産であり、人類にとって顕著な普遍的価値を持っています。

世界遺産登録への経緯

- 本市は明日香村・桜井市と共に「飛鳥・藤原の宮都」のユネスコ世界文化遺産登録に向けた活動を推進しています。2007年の暫定一覧表記載以来、長年に亘る調査・整備を経て、2025年1月に日本政府からユネスコへ推薦書が提出され、2026年夏に世界遺産として登録される予定です。

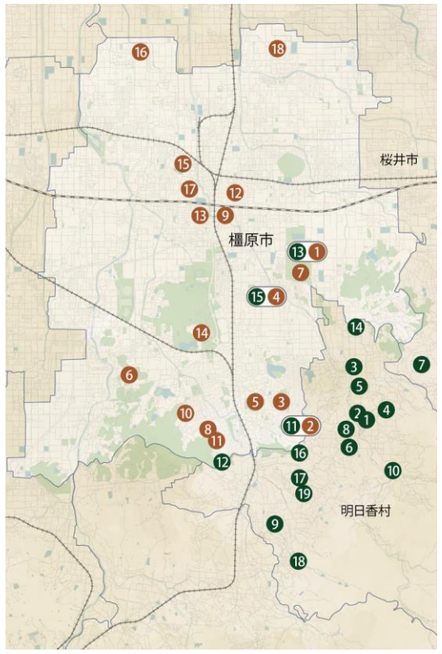
世界遺産(候補)
1. 飛鳥宮跡
2. 飛鳥京跡苑池
3. 飛鳥水落遺跡
4. 酒船石遺跡
5. 飛鳥寺跡
6. 橘寺跡
7. 山田寺跡
8. 川原寺跡
9. 檜隈寺跡
10. 石舞台古墳
11. 菖蒲池古墳
12. 牽牛子塚古墳
13. 藤原宮跡
14. 大官大寺跡
15. 本薬師寺跡
16. 天武・持統天皇陵古墳
17. 中尾山古墳
18. キトラ古墳
19. 高松塚古墳

国・県指定文化財(史跡・建築物)
1. 藤原宮跡
2. 菖蒲池古墳
3. 植山古墳
4. 本薬師寺跡
5. 丸山古墳(畝傍陵墓参考地)
6. 新沢千塚古墳群
7. 藤原京跡 朱雀大路跡
8. 益田岩船
9. 日本聖公会八木基督教会
10. 小谷古墳

市指定文化財(史跡・建築物)
11. 沼山古墳
12. 東の平田家(旧旅籠)八木札の辻交流館

国指定文化財(伝統的建造物群)
13. 今井町重要伝統的建造物群保存地区
14. 橿原神宮本殿
15. 人麿神社本殿
16. 瑞花院本堂
17. 正蓮寺大日堂

その他
18. 十市城跡



菖蒲池古墳

藤原宮跡

大官大寺塔跡

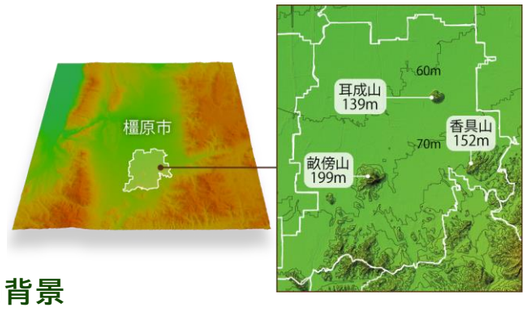
本薬師寺跡

1-4 橿原市の地勢環境

- 藤原京が都に選ばれた背景でもある、豊かで安全な暮らしを守る平坦な盆地、大和三山の美しい自然景観は、現代にもまちの魅力資源として引き継がれています。
- 古来から官道・街道が交差する交通の要衝であり、現代においても、奈良・中南和地域の広域観光周遊のハブとなるアクセス性を有しており、更なる観光や地域経済の活性化が期待されます。

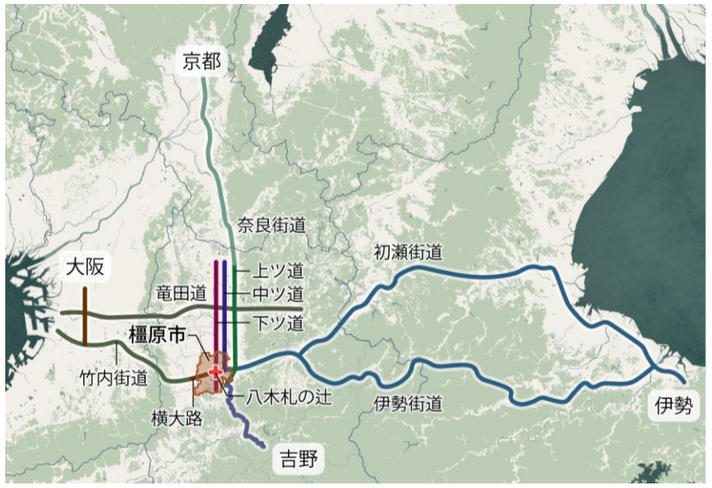
暮らしと交流を支える平坦な地形

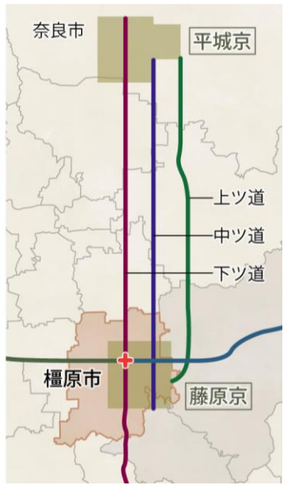
- 奈良盆地に広がる平坦な地形は、古くから人々の往来を促しています。その中央部に位置する本市でも、比較的平坦な地形により徒歩移動がしやすいという利点があり、市内の移動や生活環境に一定の利便性をもたらしています。



橿原市における交通特性と歴史的背景

- 本市は飛鳥時代、政治・文化の中心地として発展し、飛鳥・藤原宮と難波宮を結ぶ官道が通るなど、広域をつなぐ交通網の要所として位置付けられていました。
- 山々に囲まれながらも市域の中央に平野部が広がる地形は、古代から人や物が行き交いやすい条件を備えており、周辺地域との往来を支える基盤となっていました。
- 北は京都、西は大阪、東は伊勢、南は吉野へと伸びる交通網が交わる地理的条件も踏まえると、本市は地域間の移動や交流において、歴史的に見ても交通の要衝としての役割を担っていたと考えられます。



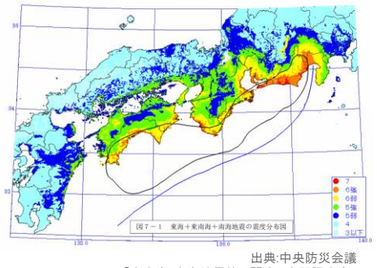


大和三山を中心とした橿原市の歴史的景観とその保全

- 本市内に点在する畝傍山・耳成山・香具山の「大和三山」は、万葉集にも詠まれた景観を現在まで継承しています。また、市街地の中で自然地形として共存しており、橿原らしい景観の骨格を形作っています。
- 本市は「古都保存法」の指定都市であり、同法に基づく歴史的風土保存区域などの枠組みのもと、歴史的景観の保全が図られています。その結果として、大都市近郊でありながら空の広がりや山並みを臨む眺望が保たれている点は、大きな魅力の一つです。

自然災害リスクの低い内陸地

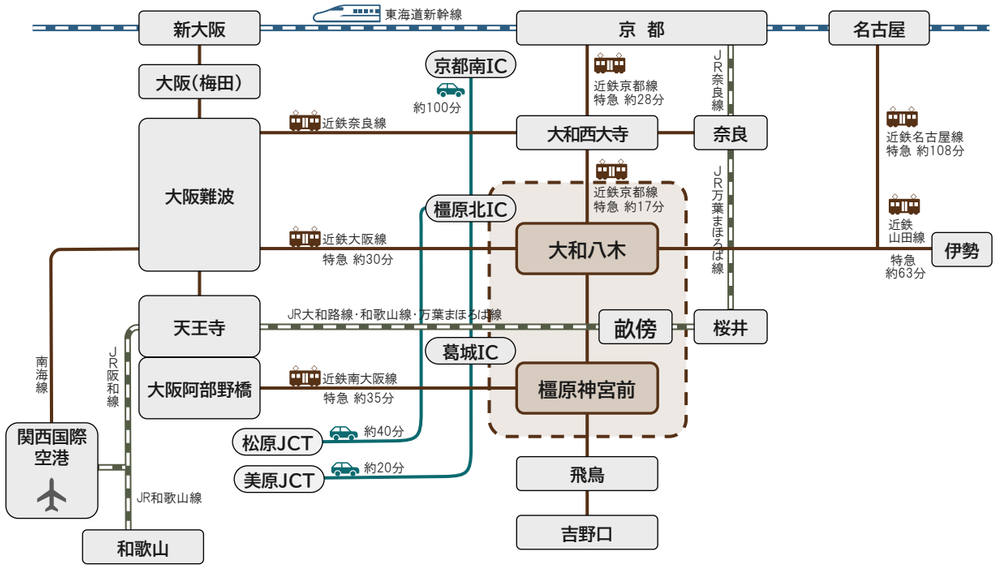
- 本市は奈良盆地の平坦な地形で海に面していないため、地震時における津波災害の心配がありません。奈良県は、東海・東南海・南海地震の想定震度が周辺地域と比べて低いことが特徴です。このため、広域災害時においても相対的な安全性が高いと考えられます。
- 本市は奈良県下の12市の中で2番目に土砂災害警戒区域指定区域数が少ない（16カ所）市です。周囲を山に囲まれており、台風や強風など甚大な自然災害の被害について、比較的リスクの低い地域であると言えます。



出典:中央防災会議
「東南海、南海地震等に関する専門調査会」
東南海、南海地震に関する報告 図表集

奈良・中南和地域の広域観光ネットワークのハブ

- 古来より培われた交通の要衝であるという特長は現代にも引き継がれ、本市は奈良・中南和地域の広域観光ネットワークを結ぶ拠点として、多様な歴史資源へのアクセスを支えています。
- 充実した鉄道・道路網により、関西広域からの交通アクセス性にも優れています。特に、明日香・桜井・天理・吉野など周辺エリアへの周遊のハブとして位置づけられ、奈良・中南和地域経済圏の中心地となるポテンシャルを有しています。



リニア中央新幹線の2037年開通

- リニア中央新幹線は、奈良県内にも駅新設が予定されており、2037年の全線開通にむけ、取組が進められています。
- リニア中央新幹線の開通後は、移動時間が大幅に短縮され、観光客増加、企業立地の促進、雇用拡大などの経済活性化や交通利便性の向上による県内各地域への周遊など、広域的な都市開発や地域振興にも波及効果が及ぶと見込まれています。

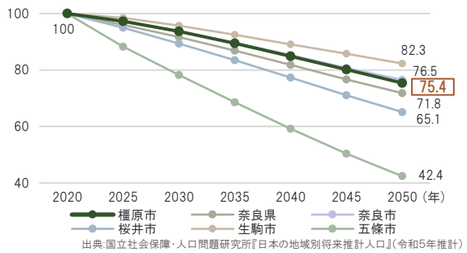
出典:奈良県HP

1-5 橿原市の現状と課題

- 市内人口は、2050年には約2割減少する予測です。特に20-29歳の転出超過が目立ち、若年層にとって住みやすいまちづくりが課題となっています。
- 観光は、宿泊施設が不足するなど、宿泊・滞在型観光需要の不足が課題となっています。
- 充実した医療提供サービスと、国・県を上回る健康寿命の長さは、本市の強みとなっています。

人口減少と見通し

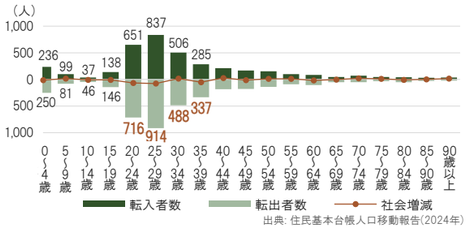
- 生産年齢人口の減少と高齢化の進行を背景に、本市の人口は2050年に約9.1万人まで減少する見通しです（2020年比では約24.6%減）。
- 桜井市や五條市などと比較すると、人口規模が一定程度保たれている一方、生駒市と比べて減少幅推計が大きくなっています。



2020年の総人口を100としたときの総人口の指数

若年世代の社会減

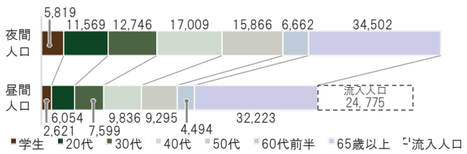
- 社会動態では、人口転出数が転入数を上回る「社会減」が続いています。特に20～39歳までの転出超過が多い傾向があります。



5歳階級別の転入数・転出数と純移動数

生産年齢人口の市外流出

- 生産年齢人口の約4割が市外へ流出しており、特に学生層（約55%）や20代（約48%）の流出率が高い一方、65歳以上は約7%に留まります。
- 関西圏の類似団体（国勢調査による）との比較では、昼夜間人口比率の高さ・流出割合の低さともに上位にあり、極端なベッドタウンではないものの、就業人口の半数以上が市外へ流出しています。
- 就業人口の昼間人口約46,000人のうち、奈良県立医科大学附属病院と大手ショッピングモールの想定従業員数で1割以上を占めます。



夜間人口と昼間人口の比較

	昼間人口比率の高さ	流出割合の低さ
1位	門真市（124.67%）	三田市（47.38%）
2位	草津市（111.05%）	草津市（49.13%）
3位	**橿原市（88.57%）**	門真市（52.50%）
4位	大東市（87.12%）	**橿原市（53.87%）**
5位	守口市（86.29%）	大東市（55.86%）
6位	三田市（86.00%）	松原市（55.92%）
7位	池田市（82.49%）	守口市（58.30%）
8位	松原市（77.74%）	富田林市（59.09%）
9位	箕面市（75.51%）	羽曳野市（59.46%）
10位	富田林市（73.69%）	箕面市（59.60%）
11位	羽曳野市（73.64%）	池田市（59.65%）
12位	生駒市（61.29%）	生駒市（67.87%）

出典:令和2年国勢調査
就業人口の昼間人口比率・流出人口割合の他都市比較

観光関連産業の事業所数及び従業員の状況

- 本市は、観光関連産業全体で見ると、従事者割合が全国平均よりやや高い傾向があります。
- 内訳では飲食・文化・小売サービスが相対的に高く、宿泊や予約・手配の分野が相対的に低くなっています。
- 本市の観光は立ち寄りや日帰り中心になりやすい傾向にあることが推測されます。

		橿原市	奈良県	全国	奈良市	明日香村
特化係数	宿泊サービス	0.650	0.939	1.000	1.450	1.482
	飲食サービス	1.464	1.070	1.000	1.216	0.897
	旅客運輸サービス	0.891	1.038	1.000	1.319	0.140
	運送設備レンタルサービス	0.892	0.602	1.000	1.322	0.000
	旅行代理店その他の予約サービス	0.506	0.682	1.000	1.274	1.086
	文化サービス	1.456	3.624	1.000	2.442	14.177
	スポーツ・娯楽サービス	0.516	1.374	1.000	2.040	5.269
	小売	1.522	1.222	1.000	1.251	0.991
	観光関連産業	1.357	1.197	1.000	1.310	1.501

出典:橿原市観光基本計画
従業者数に基づく特化係数による比較

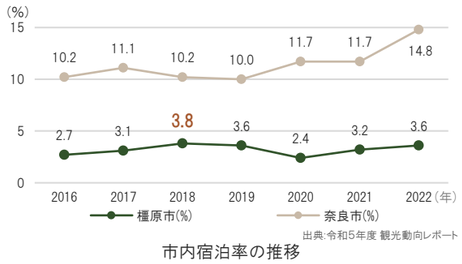
観光客数の推移

- 2020年はCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）の世界的な流行に伴い、奈良県全体で観光客数が大きく落ち込みましたが、近年は回復傾向です。
- 藤原宮跡などの世界文化遺産の国内推薦などに加え、吉野エリアなどを含めた広域の宿泊・観光周遊のハブ拠点として、観光客数が増加していくことが見込まれます。

観光客数の推移

観光客の宿泊動向

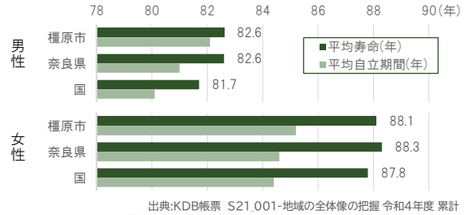
- 2016年以降の本市の市内宿泊率は、2018年が3.8%で最も高く、2022年はコロナ禍前の2019年とほぼ同水準となっています。
- 奈良市の観光客の宿泊率のような大きな伸びは見られず、宿泊率の上昇が限定的であることや、市内にはハイグレードホテル数が極めて少ないことからも、宿泊・滞在型観光が弱い傾向があります。



市内宿泊率の推移

健康寿命に関する動向・医療サービスの動向

- 本市の平均寿命は、男女ともに全国平均より長く、平均自立期間（介護・支援を受けず自立して生活できる期間）は男女共に国平均や市平均よりも長くなっており、健康に長く過ごせている人が多いと言えます。
- 国民健康保険の加入者1,000人あたりの診療所数・病床数・医師数は県や国の水準より多い状況にあります。これは奈良県立医科大学附属病院が市内に立地していることが背景にあります。



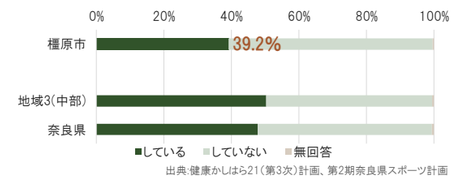
平均余命及び平均自立期間

（千人当たり）	病院数（施設）	診療所数（施設）	病床数（床）	医師数（人）
橿原市	**490**	**94.07**	**1.40**	**2.69**
奈良県	217	28.19	1.82	2.37
国	28	9.58	0.52	1.79

出典:KDB帳票 S21_001-地域の全体像の把握 令和4年度 累計）
※病院数: 診療所数・病床数・医師数を年間平均被保険者数で割ったもの
※KDBシステムでは2020年医療施設動態調査及び2020年医師・歯科医師・薬剤師統計をもとに集計
医療関連サービス（病院数・診療所数・病床数・医師数）の状況

運動・身体活動の習慣

- 1日30分以上の運動を週2回以上、1年以上継続している人の割合は39.2%です。これは、県全体や県西部地区では、5割程度である状況と比較すると、低い水準であることがわかります。
- 本市では運動習慣が定着している人が少ない傾向にあることが示されています。



1回30分以上の運動を2回以上、1年以上続けている人の割合

子どもの居場所や遊び場などについて

- 「第3期子ども・子育て支援事業計画策定に関するアンケート調査」によると、子どもの日常の過ごし方は、平日・休日ともに「家族・親族と過ごす」「学習塾や習い事」に続いて、「公園などで友達と遊ぶ」が上位に上がっています。
- 人口1,000人あたりの住区基幹公園数は近隣市村や奈良県平均より多い一方で、1人あたりの住区基幹公園面積は県平均を下回っています。

	住区基幹公園箇所計	住区基幹公園面積計(ha)	千人当り住区基幹公園箇所	1人当り住区基幹公園面積(㎡/人)
奈良市	490	94.07	1.40	2.69
橿原市	**217**	**28.19**	**1.82**	**2.37**
桜井市	28	9.58	0.52	1.79
生駒市	237	63.72	2.06	5.54
明日香村	3	3.51	0.61	7.19
奈良県	1,845	511	1.42	3.96

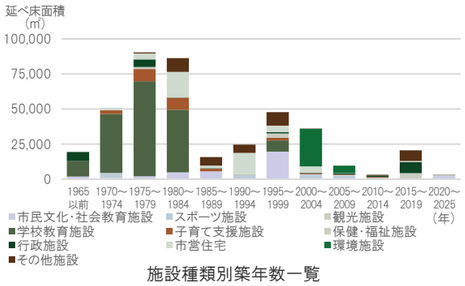
出典:国土交通省都市公園内の運動施設現況一覧表
住区基幹公園の他市比較

1-5 橿原市の現状と課題

- 高度成長期整備のインフラ老朽化による、維持管理費の増大や耐震化への対応が必要となっています。
- 子育て・教育に対する市民からの期待に対し、環境整備が追い付いていない状況です。
- 歴史への誇りは高い一方、教育・子育て・住環境などの成果指標達成度は低くなっています。

公共施設の老朽化

- 一般に、鉄筋コンクリート造の建築物は、建築後20～30年程度を大規模改修の目安とすることが多く、築30年を超える建築物は、経年劣化の進行に伴う維持管理費の増加が見込まれます。
- 1975年～1984年までに整備された建築物が多くなっています。



施設種類別築年数一覧

かしはら万葉ホール（文化ホール）

- 市民文化・社会教育施設であるこども科学館や図書館の複合施設でもあるかしはら万葉ホール（文化ホール）は、築30年が経過しています。現在は個別施設計画に基づき、計画的な維持保全がなされています。

市役所機能の分散化

- 1961年に建設された橿原市庁舎本館は、老朽化や耐震性能について課題があったため取り壊しとなり、2025年3月に解体が完了しました。
- 市役所機能は現在、本庁舎北館・東館、かしはら万葉ホール、リサイクル館かしはら、ミグランスに分散しています。

かしはら万葉ホール（文化ホール）

官民連携の取組み

- 本市では公共施設の質向上のため民間事業者の活力を導入し、Park-PFIやPFI事業、指定管理者制度の広範な適用、企業との包括連携協定による、質の高いサービス提供と地域課題の解決を実現しています。

活用手法	具体的な事例
Park-PFI	新沢千塚古墳群公園
PFI事業	八木駅南市有地活用事業(ミグランス) 市営斎場改修・運営事業
指定管理者制度	橿原運動公園、シルクの杜、観光交流センター、各地区公民館など
包括連携協定	佐藤薬品工業、イオンモール、カプコンなどの学校法人・民間企業

官民連携の取組み状況

八木駅南市有地活用事業（ミグランス）

- 本市では、中心市街地の活性化と広域観光の振興を目的に、大和八木駅南側に庁舎、ホテル、展望施設、コンベンションルームなどからなる複合施設を整備しました。
- 2018年2月に開業したこの施設は、PFI（Private Finance Initiative）手法を用いて、市と民間事業者が連携して建設・運営を行っています。（指定管理業務期間は2038年3月末まで）
- 庁舎部分には奈良県産の木材を積極的に活用することで、あたたかみのある木質空間を創出しています。

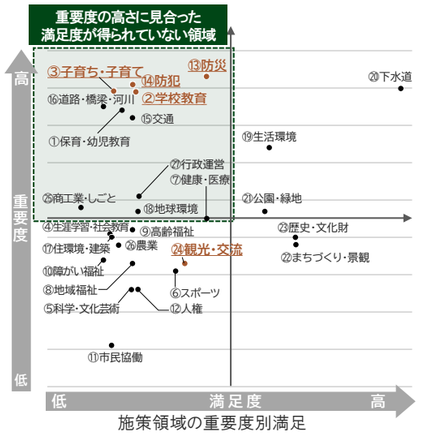
ミグランス

市民アンケートの結果

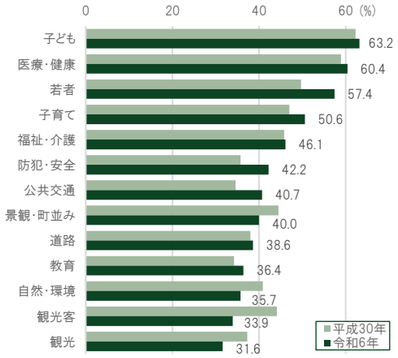
- 総合計画の成果指標や市政に関する市民アンケートの結果からは、次のような状況が読み取れます。

子育ち・子育て、学校教育

- 「施策領域の重要度別満足度」に関する市民アンケートの結果では、「子育ち・子育て」と「学校教育」は重要度が高い一方で、満足度は低迷しています。
- 「市を特徴づけるキーワード」に関する市民アンケートの結果では、「子ども」が市を特徴づけるキーワードの1位(63.2%)となる中で、期待と現状が乖離していると考えられます。
- 「学校教育」「子育て・子育ち」における総合計画の成果を測る指標でも、「子どもが主体的に学べる環境」「悩みや不安を相談できる環境」の達成度は2割弱となっています。



施策領域の重要度別満足



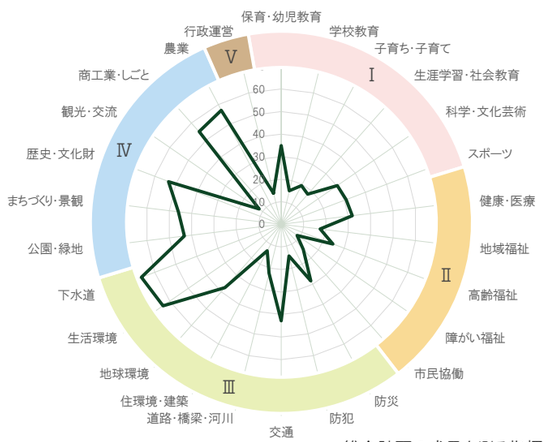
市を特徴づけるキーワードの上位項目

観光、自然・環境

- 「施策領域の重要度別満足度」の結果では、「観光・交流」の重要度は比較的低く、最優先課題と捉えられていません。
- 「市を特徴づけるキーワード」では、平成30年度と令和6年度を比較すると、「観光」「観光客」「自然」が減少し、「子ども」「医療・健康」が微増しています。
- 総合計画の「観光・交流」における成果を測る指標では、交流・観光プロモーションの伝達がなされていると感じる市民の割合は約1割で、「歴史・文化財」「まちづくり・景観」の成果指標である「誇り」や「景観」といった高評価の地域資源を、効果的な発信に結び付けられていないという結果となっています。

防災・防犯・安全

- 「施策領域の重要度別満足度」では、「防災」「防犯」が重要度が極めて高いのに対し、満足度はやや低い状況です。「市を特徴づけるキーワード」 では、令和6年度に「防犯・安全」の関心が高まっている一方で、総合計画の成果を測る指標では、「防災」は28.3%、「防犯」は14.5%に留まっています。



総合計画の成果を測る指標

Ⅰ みんなが活躍し、個性輝くまち

保育・幼児教育	34.9%	生涯学習・社会教育	17.8%
学校教育	15.3%	科学・文化芸術	30.3%
子育ち・子育て	19.4%	スポーツ	30.8%

Ⅱ みんなが健やかに、支え合って暮らせる

健康・医療	31.8%	障がい福祉	8.6%
地域福祉	17.4%	市民協働	14.9%
高齢福祉	24.6%	人権	12.4%

Ⅲ みんなが安全に、快適な環境で生活できるまち

防災	28.3%	住環境・建築	13.2%
防犯	14.5%	地球環境	37.6%
交通	42.8%	生活環境	63.7%
道路・橋梁・河川	22.3%	下水道	66.3%

Ⅳ みんなが活力と魅力を生み、賑わいあふれるまち

公園・緑地	43.2%	観光・交流	11.9%
まちづくり・景観	45.9%	商工業・しごと	54.9%
歴史・文化財	53.4%	農業	57.1%

Ⅴ 市民とともに「かしはら」をつくる信頼の行政運営

行政運営	14.2%

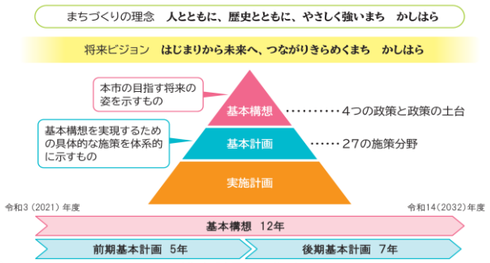
※人権は、質問回答のYES/NOの指標が逆であるため(Noが多い方がよい)左グラフから除く。

1-6 橿原市の上位計画

- 「日本国はじまりの地」という唯一無二の価値や、深い歴史・交通利便性の高さ・住みやすさを活かした重点施策を策定しています。
- 社会や技術の変化を捉え、市民・事業者・行政の協働による持続可能なまちづくりを進めています。

橿原市第4次総合計画【2021年度～2032年度】

- 「人とともに、歴史とともに、やさしく強いまち かしはら」をまちづくりの理念としています。
- 将来にわたる住みよいまちづくり、持続可能なまちづくりに向け、市民、事業者、行政が、それぞれの暮らしや仕事を通じて、それぞれの役割を果たしながら協働でまちづくりを進めていく共通の指針として「はじまりから未来へ、つながりきらめくまち かしはら」を将来ビジョンとして定めています。



総合計画の構成

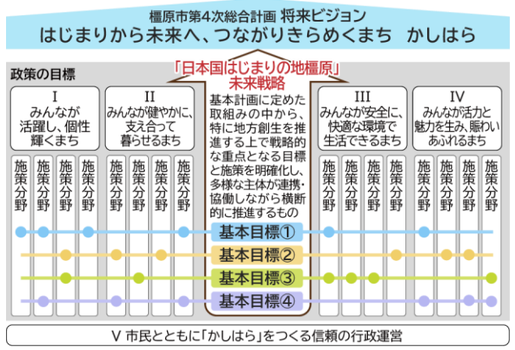
- 「日本国はじまりの地」という橿原らしさと歴史の深さを次世代に継承しながら、来たる超スマート社会にも対応していくことと、人生100年時代を迎えるなかで、人の一生の表現として出生から約100年、安心して暮らしていくことができる市になることを目指すこととされています。

施策分野の体系

政策のカテゴリーと行政の運営方針	関連施策分野	
Ⅰ ひとづくり＜活躍＞ みんなが活躍し、個性輝くまち	1 保育・幼児教育 2 学校教育 3 子育ち・子育て	4 生涯学習・社会教育 5 科学・文化芸術 6 スポーツ
Ⅱ ひとづくり＜安心＞ みんなが健やかに、支え合って暮らせるまち	7 健康・医療 8 地域福祉 9 高齢福祉	10 障がい福祉 11 市民協働 12 人権
Ⅲ まちづくり＜安全＞ みんなが安全に、快適な環境で生活できるまち	13 防災 14 防犯 15 交通 16 道路・橋梁・河川	17 住環境・建築 18 地球環境 19 生活環境 20 下水道
Ⅳ まちづくり＜発展＞ みんなが活力と魅力を生み、賑わいあふれるまち	21 公園・緑地 22 まちづくり・景観 23 歴史・文化財	24 観光・交流 25 商工業・しごと 26 農業
Ⅴ行政運営　政策の土台 市民とともに「かしはら」をつくる信頼の行政運営	27 行政運営	

「日本国はじまりの地　橿原」未来戦略【2026年度～2032年度】

- 国や奈良県の総合戦略を勘案しながら、「日本国はじまりの地」という本市の独自性を踏まえ、まち・ひと・しごと創生法第10条第1項に基づく計画として策定されています。
- 総合計画の政策に基づき、体系化された施策分野ごとに特に地方創生を推進する上で戦略的な重点となる目標と施策を明確化しています。また、多様な主体が連携・協働しながら横断的に推進するため、「歴史」・「交通利便性」・「住みやすさ」といった市の強みを活かして戦略的な重点施策（基本的方向）を設定しています。



「日本国はじまりの地　橿原」の政策体系

未来戦略の基本目標と重点施策（基本的方向）の体系

基本目標①　地の利を活かしたしごとの場づくり　～誰もが活躍できる働き場の提供・支援～

重点施策の主なねらい

- 市内外からの幅広い業種の企業誘致による雇用機会の拡大や創出
- 多様な働き方ができる場の創出、多様な人が安定して働ける場の確保
- 多様な働き方の選択肢としての起業（開業）・創業支援
- 歴史景観と便利な都市が融合したまちで元気な人たちが集まるような支援

主な取組み

- 新たな産業立地の創出
- 合同企業説明会、就職面接会の開催
- 創業に関するワンストップ相談窓口
- ビジネス商談会の開催

KPI

- 産業用地面積　30ha
- 制度融資実行件数　250件

基本目標②　新たな人の流れや交流を盛んにする魅力づくり　～歴史・文化・自然を活かして創る周遊コンテンツと魅力発信～

重点施策の主なねらい

- 橿原神宮、「飛鳥・藤原の宮都」、今井町を中心とした、市内消費額増加につながる宿泊機能も含む、市内滞在期間を増加させる周遊コンテンツづくり
- 「関係人口」「交流人口」の増加を実現するための、歴史・文化・自然を活かした観光周遊の新たなコンテンツの発信

主な取組み

- 市内の観光周遊スポットの創出
- 各種メディアを通じた魅力発信

KPI

- 宿泊者の再訪問以降率　65.0%
- シティセールス関連×年間表示件数　120万件

基本目標③　安心して子どもを産み育てられる環境づくり　～専門家と地域で紡ぐ誰一人取り残さない子育て支援・教育～

重点施策の主なねらい

- 支援、相談体制の強化、世代を超えた交流の場の創出による、地域全体で子どもを見守り育てるコミュニティづくり
- 魅力ある教育の推進と、世代を超えた交流などの幅広い知識と経験を積む場の創出
- 学校再編、施設の老朽化対策、DXの推進による個別最適な学習環境と協働的な学習の実現

主な取組み

- 支援が必要な子どもと家庭への支援
- 子どもの安全・安心な居場所づくり
- 世界遺産登録を通じた歴史教育
- 虹の広場でのICTの活用

KPI

- 療育的ニーズに合わせた支援の保護者満足度　95%
- 自律的・能動的な授業改善のサイクルに取り組む学校数　21校

基本目標④　安心して健康に暮らせるまちづくり　～一人ひとりが豊かに暮らせる「健幸」の普及～

重点施策の主なねらい

- 運動や健康づくりに取組んでみたくなるような仕組みづくり
- 健康で活動的な高齢者を増やすための取組み
- スポーツコミッションを活用した、他地域からの人流の増加や活性化
- 多様な趣味や文化的活動などの社会参加の機会創出による、心の健康を高める取組みの推進
- AI・デジタルの活用や広域連携も含めた犯罪防止や防災対策の推進による、安心・安全に暮らせる環境づくりの取組みの推進

主な取組み

- 奈良県立医科大学との連携の実施
- 防災講座の実施と防災教育の推進
- 民間福祉避難所との連携強化

KPI

- 橿原運動公園利用者数　22万人
- 長寿健康診査受診率　30.0%
- 防災講座・訓練において地域防災力向上を感じる団体数　49団体

1-6 橿原市の上位計画

- 「魅力・利便性・安心」を掲げ、拠点間の連携と地域特性を活かしたまちづくりが推進されています。
- 医大周辺地区の整備、運動公園再整備など、国スポや世界遺産登録を見据えた開発が進行中です。

橿原市都市計画マスタープラン【2023年度～2032年度】

- 「『住み続けたい』『住んでみたい』まちづくり」をまちづくりの基本的な考え方として定め、「魅力」「生活利便性」「安全・安心」を高めることをまちづくりの目標として定めています。
- 各拠点が公共交通などのネットワークにより連携しながら活性化する、バランスの取れた都市構造を目指しています。また、大和八木駅～畝傍駅周辺や橿原神宮前駅周辺を中心に都市機能を充実し、市街地の無秩序な拡大を抑制したり、既存の公共施設を活用したまちづくりを推進することで、持続可能な都市構造の形成を目指すとしています。
- 多くの人や物が集まり、市を特徴づける場所である「拠点」と、「拠点」間又は周辺の市町村を結ぶ動線である「軸」によって、将来の都市構造を整理しています。また土地利用の方向性として、面的な広がりや土地利用を誘導する「都市拠点」や「都市シビックゾーン」を位置付け、バランスの取れた持続可能な都市構造を目指すこととしています。

土地利用構想(抜粋)

まちづくりの方針

大和八木駅周辺地区	● 大和八木駅周辺は、駅北側の市街地改善を行いながら、奈良県内の中心都市の玄関口にふさわしい機能の強化や、商業・サービス施設の立地誘導、商店街通りなどにおける歩行者の回遊性の強化など、賑わい拠点の形成を推進することとされています。 ● 今井町においては、重要伝統的建造物群保存地区における街なみ環境整備事業などを継続して実施し、歴史的町並み景観の保存整備の取組みを推進することとされています。
医大周辺地区	● 医大、県、市が連携して健康増進の拠点としてまちのブランド力を高め、次代の奈良を担う学生・教職員や住民、来訪者など多様な人々が集い交流を深めることにより、地区全体がキャンパスのように活気溢れるまちづくりを推進することとされています。
橿原神宮前駅周辺地区	● 既存の商業・サービス機能の再編・活性化など、奈良県南部の観光の玄関口にふさわしい、賑わいの拠点の形成を推進することとされています。

橿原市立地適正化計画【策定中】

- 全国的に人口減少や少子高齢化が進行する中でコンパクトなまちづくりと地域公共交通の連携により、将来にわたって暮らしやすい持続可能なまちを目指すため、立地適正化計画の策定に取り組んでいます。

1-7 市内のまちづくり

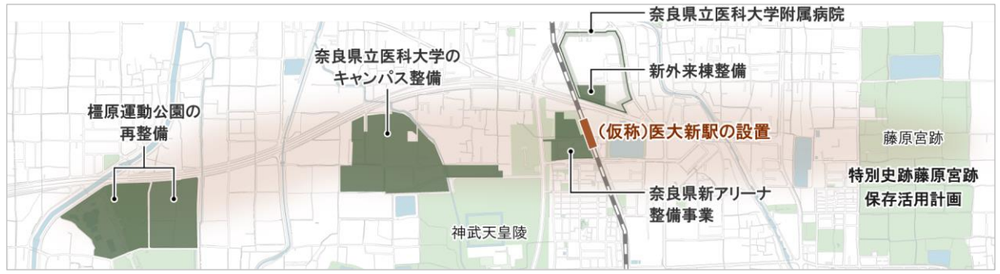
橿原市内の昨今のまちづくりの動き

- 本市では、歴史文化の保全や観光を基盤とし、スポーツ推進など多面的なまちづくりを展開しています。また、奈良県立医科大学のキャンパス再整備、国民スポーツ大会の開催、飛鳥・藤原の宮都の世界遺産登録を大きな契機として、公共施設や公共空間の再整備の取組みが進められています。

大和八木駅周辺のまちづくり

近鉄大和八木駅周辺プロジェクト	● 県内有数の交通・交流の要衝である近鉄大和八木駅北側のまちづくりについて、まちづくり協議会で県と橿原市が連携して検討していくこととされました。

医大新駅周辺のまちづくり



リーディングプロジェクトの実施予定地

橿原運動公園の再整備	● 市が橿原運動公園を再整備し、運動公園の北東区域に国民スポーツ大会の基準に対応した新体育館(2階建て)と屋内プールを建設する計画で、2030年度の完成を目指しています。
奈良県立医科大学のキャンパス整備	● 老朽化した大学施設の刷新と機能強化を目指す大規模プロジェクトで、教育・研究部門の新キャンパス移転の計画です。 ● 新キャンパスは2025年4月から一部供用を開始し、順次移転を進められています。附属病院の新外来棟整備は既存敷地内の旧教育研修棟・スキルスラボ棟・看護学科棟跡に2031年度の竣工を目指し、計画的に事業が進められています。
(仮称)医大新駅の設置	● 近鉄橿原線の八木西口駅と畝傍御陵前駅の間に設置される新駅で、奈良県、橿原市、近畿日本鉄道の3者が連携し、2025年3月に基本協定を締結したことで事業化が決定しました。奈良県立新アリーナ整備事業に合わせて、2030年度中の供用開始を目標としています。
奈良県新アリーナ整備事業(県実施)	● 奈良県が主導し、スポーツ観戦やコンサートなどの大規模イベントに対応可能な多機能アリーナを新設する計画です。2030年度の完成を目指しています。
特別史跡藤原宮跡保存活用計画	● 藤原宮跡の現況や策定以降の社会情勢などの変化に対応するため、当史跡の保存と活用に関する計画を策定し、文化庁からの認定を受けました。

橿原神宮前駅周辺のまちづくり

橿原公苑再整備(県実施)	● 橿原公苑は、2031年の国民スポーツ大会に向けて、既存のスポーツ施設を中心に機能更新と長寿命化を図る再整備が進められています。

1-8 背景のまとめ

橿原市のSWOT分析

- 本市を取り巻く状況を、SWOT分析（強み：Strength、弱み：Weakness、機会：Opportunity、脅威：Threatの要素で環境を分析する手法）でまとめると下記のようになります。強みや機会を強化・活用する一方で、弱みを補完し、脅威を機会に変えるための挑戦が重要です。

内部環境

強み（Strength）

唯一無二の歴史文化遺産の集積(1-3)
- 藤原宮跡や今井町など、古代から近世にわたる貴重な歴史・商業遺産が市内に集積しています。

平坦な地形と大和三山が生む風土(1-4)
- 平坦な地形で移動しやすく、古くから人々の往来を促してきました。大和三山など山に囲まれた地形は、歴史的風土と災害リスクの低い環境を形成しています。

中南和観光ネットワークのハブ(1-4)
- 古来から現在に至るまで広域交通ネットワークの拠点であり、地域経済圏の中心性を有しています。

高度な医療インフラの充実と高い健康水準(1-5)
- 県立医科大学附属病院など充実した医療体制を背景に、高度医療サービスが提供されています。市民の健康寿命が長く、医療・健康への関心度が高い傾向にあります。

主要プロジェクトによる都市機能の充実(1-7)
- 医大新駅や新アリーナ整備、国スポ開催に向けた拠点整備により、都市機能の充実が進みます。

弱み（Weakness）

少子高齢化・若年層の転出など人口減少(1-5)
- 今後30年間で2割程度の人口減少が見込まれているほか、若年層の転出超過が続いています。

子育て・教育環境拡充に対するニーズ(1-5)
- 市民の期待感の高さに対して、子育て・教育の環境整備に対する満足度が低くなっています。

情報発信と滞在型・回遊型観光の不足(1-5)
- 交流・観光プロモーションの不足や宿泊機能の不足などにより、来訪者の市内滞在期間や消費額はあまり伸びていません。

公共施設・インフラの老朽化と維持管理費増大(1-5)
- 1975年～1984年に整備された施設などの老朽化が進んでいます。維持管理費の増大は、財政的にも市政運営における大きな課題ともなります。

外部環境

機会（Opportunity）

新技術活用とライフスタイルの多様化(1-1)
- Society5.0、DXや脱炭素の推進などは、人々の働き方やライフスタイルを多様化させ、関係人口・活動人口の増加と新たな価値を生み出します。

リニア開通による広域連携の強化(1-3)
- リニア開通は、中南和地域の広域的な連携を促し、地域のさらなる活性化に繋がる好機です。

世界遺産登録による国際認知向上(1-4)
- 「飛鳥・藤原」の世界遺産登録により、世界的な観光・交流拠点としての成長が期待されます。

インバウンド需要の回復と地方波及(1-5)
- 関西万博などを契機としたインバウンドの回復は、地域資源を活かした地方創生の大きなチャンスです。

脅威（Threat）

人口減少局面における地域経済の縮小(1-1)
- 人口減少やそれに伴う都市のスポンジ化、大都市圏への局所的な資本集中が進む中で、地域経済の維持・回復が求められます。

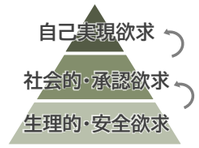
行政サービスの持続性を揺るがす社会変化(1-1)
- 急激な社会情勢の変化に対応するため、社会変化に合わせた柔軟な自治体経営のあり方が求められます。

巨大災害の発生リスク(1-5)
- 将来的な巨大災害への備えなど、外部要因への継続的な対応と、市民一人ひとりの意識向上が課題です。

1-9 真に選ばれるまちとは

1. 真に選ばれるまちとは

- 「真に選ばれるまち」とはどのようなまちか、住む・働く・訪れるという視点で下図の通り整理します。また、右図のように人間の欲求は階層構造にあり、低次の欲求が満たされると、一段階上の欲求が高まります。「真に選ばれるまち」となるには、低次の欲求（生理的・安全欲求）を満たすことはもちろん、高次の欲求（自己実現欲求）を満たし、だれもが自分らしく暮らせる環境が重要です。



※アブラハム・マズローが考案した「欲求五段階説」を3段階に簡略化

住み続けたい／住みたい
- 自分の持つ可能性を発揮できる ／ 自分らしい暮らしが実現できる
- ここちよい人とのつながり（コミュニティ）がある ／ 自分の考え・意見が尊重される
- 心身ともに健康に ／ 安全安心に生活ができる（子育て世代～高齢者まで）

働きたい
- 新たな挑戦にチャレンジすることができる（起業・プロジェクトなど） ／ 応援してもらえる
- 地域社会や地域コミュニティと接点を持ち、横のつながりがある・仕事ができる
- 多様な働く場がある ／ 働く場を選ぶことができる

訪れたい
- 訪れることで新たな価値観・考えを手に入れることができる／ココでしか体験できないことがある
- 地域の人と関わることができる、まちの歴史や文化を深く知ることができる
- 安全安心に過ごすことができる（多言語・情報収集）／移動がしやすい

強み（Strength）と機会（Opportunity）の活用
- アイデンティティの核であり、目的地となる唯一無二の魅力資源や新たな都市機能
- 平坦で移動しやすく、災害リスクの低い環境
- 医療・健康への意識の高さ
- 交通利便性の高さ
- 技術の進化とライフスタイルの変化
- インバウンド需要の回復と地方波及

弱み（Weakness）と脅威（Threat）の克服
- 少子高齢化と生産人口の流出
- 子育て・教育機能拡充の必要性
- 情報発信と滞在型・回遊型観光の不足
- 地域経済の縮小
- 社会変化に適応した自治体経営のあり方
- 気候変動、環境問題

2. 目指すべき方向性と本市で取り組むにあたっての重要なキーワード

ウェルビーイングなライフスタイルの実現
こころもからだも健やかに、居心地のよいコミュニティの中で自分らしくいきいきと過ごせるライフスタイル

サステナブルなまちの実現
環境・社会・経済のバランスをとり、子供から高齢者までだれもが活躍できる持続可能なまち

ウォーカブル
- 本市の平坦な地形や、魅力的な目的地の点在を活かして、ウォーカブルなまちづくりを推進します。
- 歩くことで心身の健康につながるほか、人と人、人とまちが出会うことで、まちのにぎわいや地域コミュニティ、地域経済の循環が生まれます。

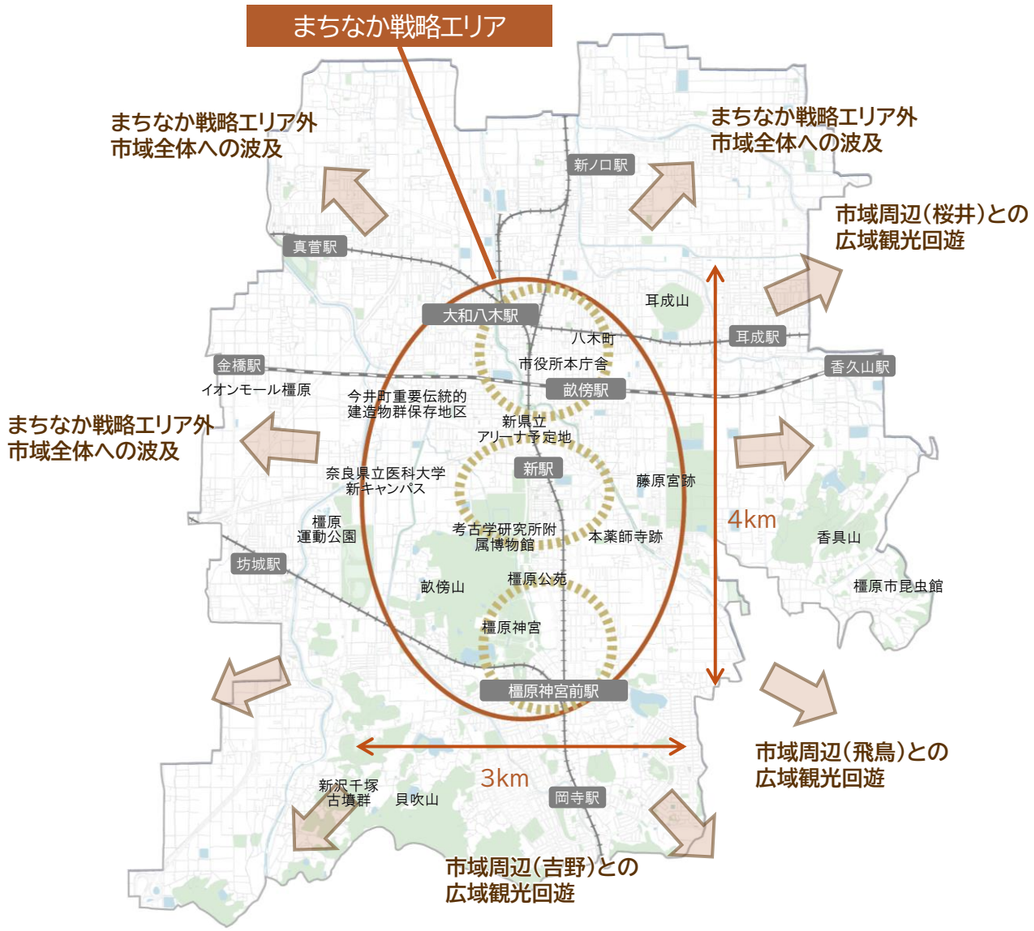
多様で多層な場の使い方
- 生産年齢人口の流出や、子育て・教育機能拡充の必要性等を受けて、あらゆる世代の多様な活動が多層的に行われるまちを目指します。
- 職住商遊が混ざり合い、用途や機能が混在することで、選択肢が多く自分らしく生きられるまちとなります。

関係人口・活動人口の拡充
- 本市ならではのアイデンティティや、交通利便性の高さを生かして、関係人口・活動人口を増加させます。
- シビックプライドを持ち、自分事としてまちの魅力化や、課題解決に取り組むなど積極的にまちに関わる人材が重要です。

1-10 まちなか戦略エリアの設定

まちなか戦略エリアの設定

- 本市グランドデザインを適用する重点範囲「まちなか戦略エリア」を設定します。コンパクトシティの概念（1-2参照）や国土交通省などが示すウォーカブルなまちづくりの考え方を参考に、市内の主要駅「大和八木駅・畝傍駅」「医大新駅」「橿原神宮前駅」を起点にまち歩きができる半径600mの範囲を包含する、大和三山で囲まれた南北4㎞×東西3㎞の楕円状の範囲とします。
- 重点エリア1：大和八木駅・畝傍駅周辺エリア、重点エリア2：医大新駅周辺エリア、重点エリア3：橿原神宮駅前周辺エリアの外も回遊ネットワークでつなぎ、市域全体への波及効果を図ります。また、共に世界遺産登録が見込まれる桜井市や明日香村との連携についても検討していきます。
- 「まちなか戦略エリア」を起点にまちづくりを進めることで、人々の身体的・精神的・社会的な満足度を高めるとともに、地域経済の活性化や地域コミュニティの強化を図り、人もまちも健康になる、「サステナブル」で「ウェルビーイング」な橿原市を目指します。



15分都市圏（15-Minute City）

- パリでは、車利用の低減や歩行者空間の充実化を目的とし、買い物、仕事、娯楽、文化、スポーツ、医療など、生活に必要なものすべてが自宅から徒歩15分でアクセスできるという考え方をまちづくりに導入しています。
- 15分都市圏の実現にあたって、既存の施設を様々な形で有効活用することを基本としています。
  ※徒歩15分 ＝ 1.2km（80m/分換算）
- セーヌ川沿いは、2002年からParisPlages（パリのビーチの意）で夏季に一時的に人工ビーチを作る取組が行われていましたが、2012年頃より順次歩行者専用空間化が進められています。

出典：パリ市HP、国土交通省「ウォーカブルなまちづくりの海外事例紹介」

まちの主役を歩行者に変えたニューヨーク市「プラザ・プログラム」

- ニューヨーク市では、ブルームバーグ前市長のもと、官-民-学の協働体制の構築やプラザ・プログラム等の制度創設が行われました。
- 車道や駐車スペースなどを「プラザ」と呼ばれる社会的な公共空間に作り替える運輸局管轄のプログラム。利活用の事例としては、沿道の公園やカフェとの一体的な空間の形成や、マーケットやアート活動の場としての利用などが挙げられます。

出典：一般社団法人ソトノバ、一般財団法人自治体国際化協会

大阪府大阪市の事例：駅前のタクシープールや車道等の道路空間を再編した「なんばひろば」

- 広場整備前のなんば駅前の空間は、ほとんどがタクシーと車のための空間であり、滞留行動は喫煙に限られ、放置自転車や旅行者の増加による混雑など、快適で安心できる環境とはいえない状況でした。
  また、検討を開始時には「大阪の他エリアの開発に伴う地域商圏の縮小・エリア間競争の激化」「治安・環境の改善」といったエリア全体の課題も抱えていました。その後、インバウンドの観光客の増加により、歩行者が大幅に増加し、歩行者空間の不足が新たなエリア課題として加わりました。
- これらの課題を解決するために、地元が中心となり、行政や経済界も巻き込み、官民連携プロジェクトして推進され、2023年11月23日に広場部分が先行オープン、2025年3月に広場からなんさん通り（南北区間）の工事が全て完了し、全体完成しました。

出典：なんばひろば改造計画HP（なんば広場マネジメント法人設立準備委員会）

2. まちづくりのコンセプト

2-1 まちづくりグランドデザインのコンセプト

01 橿原市の歴史

日本建国の地

- 日本最古の正史ともされる『日本書紀』において、日本建国の地と記された橿原。後の神武天皇が、豊かで平和な国づくりをめざして、現在橿原神宮がある地に橿原宮を創建されました。
- 紀元前660年、橿原宮で即位し神武天皇は初代天皇になったとされています。

日本国はじまりの地

- 本市は、条坊制の都「藤原京」、体系的な法律「大宝律令」が最初にできた都市です。
- ここで中央集権国家が生まれ、自らを「日本」と名乗りを上げ、「日本」という国が始まりました。

02 橿原市の木

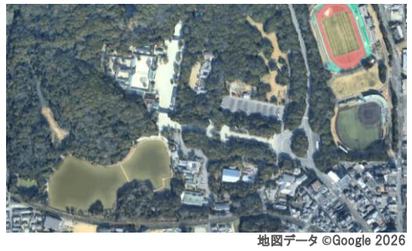
歴史・現在・未来をつなぐ「橿の木」

橿原市の木である「橿（かし）」

- 畝傍山周辺の縄文時代の遺跡からは、イチイガシの根や大量のドングリが出土したことから、当時は一帯がカシで覆われていたと言われています。

「橿（かし）」に守られてきた橿原神宮

- 橿原神宮の造林では、郷土の由来であった、力強く丈夫なカシが選定され、いまなお森厳な樹林地に育って、橿原神宮が守られています。



地図データ ©Google 2026

03 橿原市のまちのあるべき姿

まちづくりのあるべき姿を象徴する「橿の杜」

- 本市の由来である「橿の木」は、時代を超えて豊かに育ち、常緑樹として年間を通じて人々に憩いと癒しの場として心地よさを提供する、本市のアイデンティティであり、市民にとってかえがたい存在「杜」となっています。
- 「橿の杜」の中では、多様な生態系が育まれており、自然の力によって新陳代謝や循環がなされ、永続的な繁栄と自律的な成長が営まれています。
- 『橿の杜』は、「ウエルビーイング（個人や社会のよい状態）」「サステナブル（持続可能）」「ダイバーシティ（多様性と共生）」「レジリエンス（強靭さ・安心）」といった、本市の将来のまちのあるべき姿を表わし、「シビックプライド（市民愛着）の醸成」につながる象徴になるものと考えます。

まちづくりグランドデザインコンセプト と 4つのまちなか戦略

「日本のはじまりの地」から新たにはじまる、『橿の杜（もり）』に見立てた未来のまちづくり

2-2 橿原市における30年後のライフスタイル

30年後の未来社会において、内閣府ムーンショット目標に掲げられているような技術革新が進んだ場合、人々のライフスタイルも大きく変化していくと考えられます。

30年間のテクノロジーの進化

人々の社会活動において、場所、時間、能力の制約が取り払われる

- 超高速通信技術や個別分野に特化した高度なAI技術、ロボティクス化が飛躍的に進みます。
- 遠隔で高度な作業や学習が可能になったり、個々の知的・身体的能力が補完され、誰もが望む活動を行うことができるようになります。
- 遠隔技術の高度化により移動の必要性が低下するとともに、物流や交通が効率化され、ヒト・モノの移動自体も容易になります。

テクノロジーの進化に伴うライフスタイルの変化

ライフスタイルの選択肢が広がる

- 必要なモノやサービス、人とのつながりが、より身近に、より手軽にアクセスできるようになり、物理的・心理的距離が縮まります。
- デュアルライフやワーケーションなど、移動や住まい、働く場所の選択肢が広がり、いつ・どこで・何をするのか自由に選べるようになります。

ライフスタイルのボーダレス化

- 時間と場所の制約がなくなり、デジタルとリアルを自由に行き来できるようになることで、仕事・趣味・生活の境界があいまいになり、流動的なライフスタイルが生まれます。

個人の豊かさと社会の持続可能性が一体となる

- テクノロジーの進化により、個人が自分らしく心地よく生きる(＝ウェルビーイングな)ライフスタイルと、持続可能(＝サステナブル)なまちが相互に影響を及ぼし合い、それぞれの深化を促す好循環を形成します。

ウェルビーイングなライフスタイル

移動:
多様化・効率化・オンデマンド化により、**誰もが移動しやすくなる**。歩くことなど**移動自体が体験価値**につながる。

消費:
遠隔体験や仮想空間により、**離れた地域の商品・サービスを知り、選ぶ**ことができる。

食事:
情報収集や移動のしやすさにより、**新鮮で質の高い、地域の食材を知り、楽しめる**。

くらし:
多拠点生活が身近になり、住む場所を自由に変えられる。**どこでも快適に暮らせる環境**が整う。

家事・仕事:
省人化で**余暇が増える**。**「人ならでは」の価値が重視**され、人の**仕事が高付加価値化**する。

趣味:
デジタルとリアルが融合し、**体験の質が進化**する。仮想空間の普及とともに、**実空間や実体験の価値が高まる**。

運動・身体活動:
人間拡張テクノロジーにより、**誰もが自由に身体を動かせる**ようになる。

サステナブルなまち

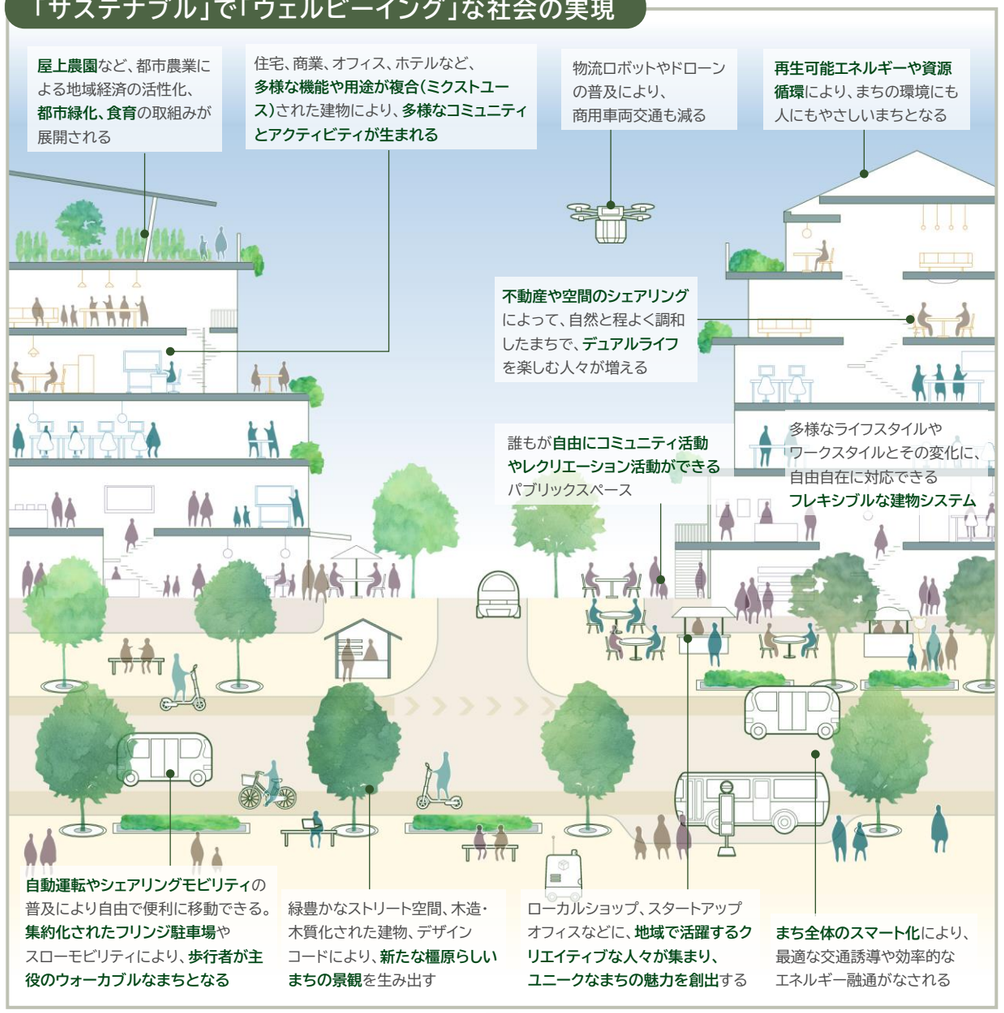
交通:
ウォーカブル化とスマート化により交通効率が向上し、**環境負荷が低減**する。

建物・不動産:
建築物の**多目的化・複合化**や**シェアリング**、**既存ストックの活用**が広がる。

地域経済:
地産地消やローカルビジネスなどにより、**地域内で経済活動が循環し、コミュニティが活性化**する。

資源・エネルギー:
再生可能エネルギー・循環可能資源の活用により、限りある**資源を次世代につなぐ**仕組みが整う。

「サステナブル」で「ウェルビーイング」な社会の実現



まちなか戦略の着実な実行

- 30年後のまちのあるべき姿として、「サステナブル」で「ウェルビーイング」なライフスタイルを本市で実現するために、4つのまちなか戦略を展開します。

まちなか戦略 1 「橿の杜」を共創する仕組みづくり

まちなか戦略 2 多様な「にぎわいの杜」づくり

まちなか戦略 3 杜と杜をつなぐ有機的・多層的なネットワークづくり

まちなか戦略 4 「橿の杜」を持続的に成長させるエコシステムづくり

3. 4つのまちなか戦略

「橿の杜」を共創する仕組みづくり

30年後に向けて目指すべき「将来ビジョン」を共有する

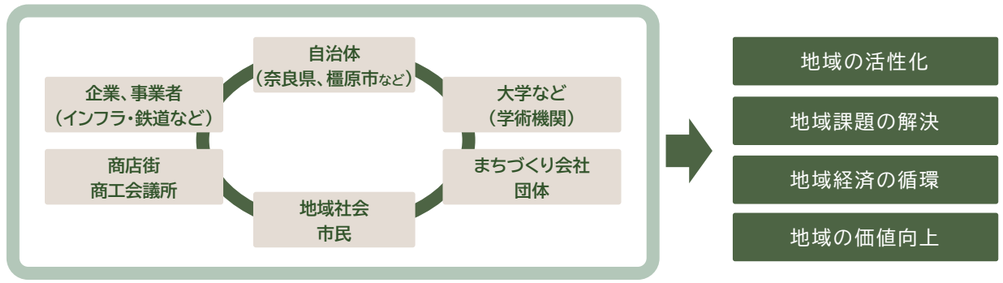
コンセプトブックやムービー、SNSなどを活用した周知活動

- 今後、グランドデザインの内容を市民や多様な主体に普及しまちづくりを共創するために、わかりやすいコンセプトブックや動画などを用いた継続的な周知活動を実施します。本グランドデザインの重要性や手法への理解を深めてもらい、市民や多様な主体に共感をもって主体的にまちづくりに参画してもらうことを目指します。

「橿の杜のまちづくり」の実現に向けた公民連携の体制づくり

- 近年、多様化・複雑化が進むまちづくりの課題には、公共と民間の両方の視点からのまちづくりが求められます。
- 公民連携によるまちづくりのメリットは、行政だけでは難しい市民ニーズに合った多様なサービス実現、新たな事業や雇用の創出、地域課題の解決、公民双方の収益機会創出、そして市民の主体性・地域への愛着向上とコミュニティ強化など、行政・市民・企業の三者それぞれに多岐にわたります。

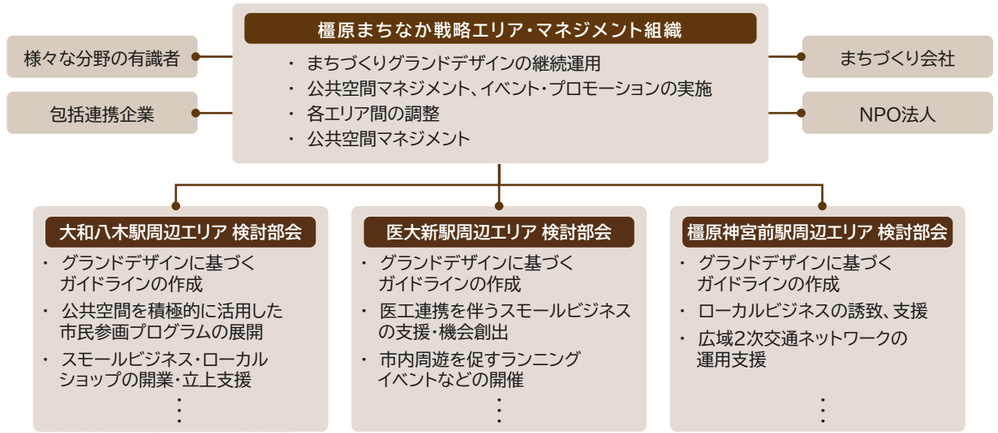
公民連携によるまちづくり



橿原まちなか戦略エリアマネジメントの組織化

- グランドデザインの実現・観光コンテンツの企画に向けて、橿原まちなか戦略エリアマネジメントの組織化を検討します。産官学連携プラットフォームとして、広範なステークホルダーがそれぞれの特長を生かして共創・連携することで、本市ならではの独自性のある取組みや課題解決につながります。

エリアマネジメント体制イメージ



市民参画・協働を促す多様な機会の提供

- 市民参画・協働によるまちづくりは、単に市民の声を集めるだけでなく、その声を計画や政策に反映させることが重要です。そのプロセスにおいては、多様性が確保されていることや、透明性が確保されていることが求められます。

主体性を育み、相互作用を生み出すワークショップなどの実施

- ワークショップの実施においては、主役である参加者の主体性や多様な主体の参加による相互作用の育みが重要です。様々なアイディアや意見交換を通じて、合意形成を図ります。

デジタルプラットフォームを用いた、市↔市民の双方向コミュニケーション

- デジタル技術を活用した市民サービスの向上・まちづくりへの積極参加を促進します。web上で、市と市民、市民と市民をつなげるプラットフォームなどをつくることで、まちづくりへの参加の裾野を広げます。

デジタルプラットフォーム上の双方向コミュニケーションのイメージ

- 市があげたテーマに対して市民が自由に書き込み （例:行きたいまちなかってどんなところ？）
- デジタル付箋マップによるまちの魅力の可視化 （市民がまちの魅力を、マッピングしていくシステム）
- 市民コミュニティやアクティビティのマッチング、新規事業アイデアの市民公募など

小さなアクションを実証・試行しながら進めるまちづくり

社会実験や市民参加イベントの実施

- 多様な主体の理解・合意が必要なまちづくりにおいては、社会実験や市民参加イベントの実施により「小規模から」、「実験的に」導入し、効果や課題を確認する方法が有効です。それらは、市民ニーズの汲み取りや理解の促進が達成されるだけでなく、市民のコミュニティ醸成やまちづくりへの主体的な参加意欲向上につながります。

メタバースなどを活用したまちづくりの試行

- 大規模な整備においては、メタバースなどの活用により整備後のまちの姿を仮想空間上に再現し試行をすることで、より効果的なまちづくりを実施することが可能です。また、一度構築したメタバースを転用し、エンターテインメントコンテンツへ活用することなども考えられます。

愛知県岡崎市の事例：社会実験「MeguruQururwa」

- 一過性の非日常のイベントではなく、未来の日常をつくるという目的を掲げ、公園や川、駐車場、道路といった公共空間毎に検証項目とテーマを設定。
- 民間の担い手それぞれの「やってみたい」という思いを実行し、その活動を継続させるための可能性を検証しました。

出典：特定非営利活動法人　岡崎まち育てセンターりた

次世代のまちづくりのためのデジタルプラットフォームづくり

分野横断デジタルプラットフォームの構築

- 今後、行政機能や物流、交通、医療など多くの分野でデジタルを用いたサービスの提供が進められます。その中で、分野を横断したデータの利活用や、他地域との連携が可能な都市OSなどの構築を検討します。

公民連携を加速させるオープンデータの推進

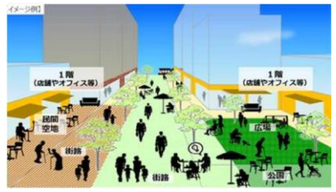
- これからの人口減少社会や、複雑化する課題の解決には、官民がともに解決策・実現策を一緒に考えることが必要です。これまで一般に公開せず、市民や事業者によるアクセスが難しかった公共データを、二次利用可能なデジタルデータとして公開することで、社会課題の解決や新事業の創出、経済の活性化にもつながります。

まちなか戦略2 多様な「にぎわいの杜」づくり

橿原市から始める「ウォーカブル＋（プラス）」なまちづくり

- 人口減少や高齢化が進みまちの活力低下が懸念される中、多様な人々の出会いから生まれるまちのにぎわい、地域コミュニティ、地域経済の循環が求められます。これまで車中心だったまちなかを「人中心」のまちへ転換するためには、人々が「歩きたい、過ごしたい」と感じることのできる、豊かな空間づくりを推進することが重要です。このような「居心地が良く歩きたくなるまちなか」は、市民にとっても外から来訪する人にとっても魅力的でありイノベーションの創出やウェルビーイングな生活を実現します。
- 本市では国土交通省が、「居心地が良く歩きたくなるまちなか」として掲げる4つのキーワード（Walkable／Eye level／Diversity／Open）に、（DX／Mobility）を加え、居心地が良く、誰もが楽しく自由に歩き、移動したくなるまちなか「ウォーカブル＋」を目指します。

Walkable（ウォーカブル）歩きたくなる
Eye level（アイレベル）まちに開かれた1階
Diversity（ダイバーシティ）多様な人の多様な用途、使い方
Open（オープン）開かれた空間が心地良い
＋
DX（デジタルトランスフォーメーション）デジタル技術が出会いを促進
Mobility（モビリティ）スローでパーソナルな移動手段



出展：国土交通省「都市の多様性とイノベーションの創出に関する懇談会」 令和元年6月中間とりまとめより

多様なステークホルダーが集う、まちづくりとコミュニティの交流拠点

- まちに積極的にかかわる「活動人口」が増え、誰もが自分らしくいきいきと過ごせるまちなかを目指し、まちづくりとコミュニティの交流拠点の設置を推進します。

交流拠点施設の設置イメージ

- 市民・企業・団体・学校・市役所などの多様なステークホルダーが集い、身の回りの課題やこれからのまちづくりについて話し合い、共に解決し新たな取組みを進める『橿の杜コミュニティ・ラボ』 の設置を検討します。コミュニティ・ラボを核に新たなつながりや新たな実験が始まります。

茨木市のウォーカブルなまちづくり

- 茨木市では、阪急茨木市駅とJR茨木駅周辺のエリアを「コア」、中央の市役所やおにクル（文化・子育て複合施設）、広場、元茨木川緑地周辺のエリアを「パーク」と位置づけ、「2コア1パーク」による都市構造の実現に向けた、さまざまな事業や取組を推進し、中心市街地の活性化を目指しています。

※パークから2つのコアまでそれぞれ約600m

出典：茨木市HP

出典：おにクルHP

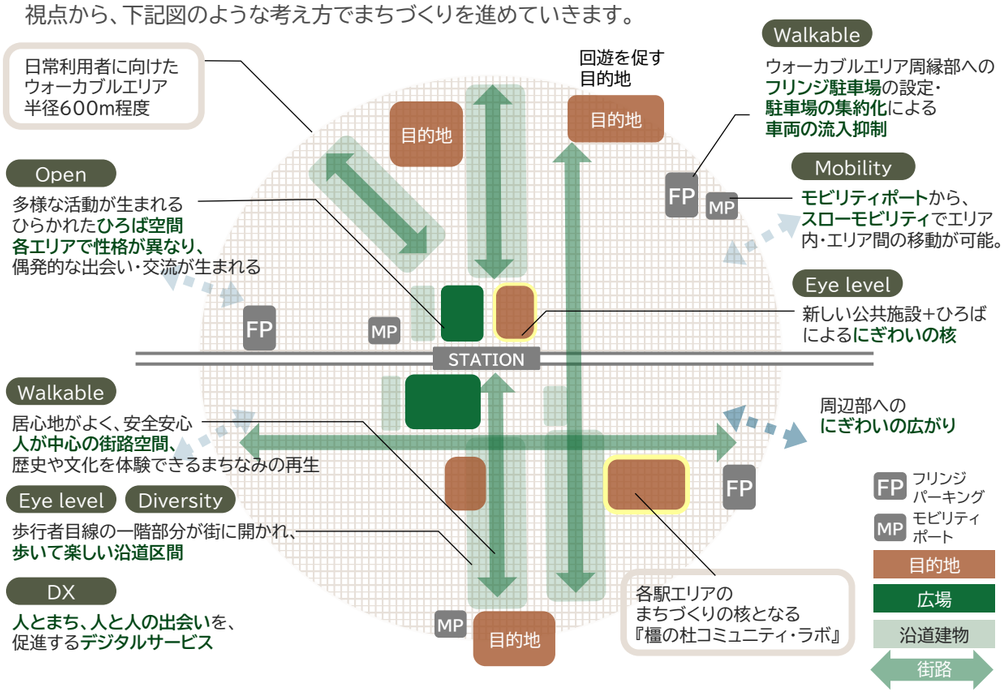
マルチステークホルダーによる新しい共創のかたち「鎌倉リビング・ラボ」

- 駅からのアクセスが悪く、高齢化が進むエリアで、リビングラボのプロジェクトがスタート。
- 住民発の課題が提示される中で（株）イトーキのほか、大手ハウスメーカー、通信事業会社が参加し、通勤しなくても自宅で快適に仕事ができる環境づくりの1つとして「テレワークしやすい家具づくり」が進められました。マルチステークホルダーによる共創サイクルを回しながら、商品の開発・販売に至りました。

出典：鎌倉市リビングラボHP

駅を中心とした居心地がよく歩きたくなる「駅まちウォーカブルエリア」

- まちなか戦略エリアの中に、駅を中心とした「駅まちウォーカブルエリア」を形成します。エリア内は、歩きたくなるまちなかのキーワード「Walkable／Eye level／Diversity／Open＋DX／Mobility」の視点から、下記図のような考え方でまちづくりを進めていきます。



駅まちウォーカブルエリアの設定

- 「大和八木駅・畝傍駅周辺」「医大新駅周辺」「橿原神宮前駅周辺」に、各エリアごとの特性に合わせた概ね半径600mの「駅まちウォーカブルエリア」を設定します。

重点エリア1：大和八木駅・畝傍駅周辺エリア
- 大和八木駅と畝傍駅に囲まれたエリア

他主要施設
- 大和八木駅北口周辺エリア再開発構想
- ミグランス、橿原市役所本庁舎
- 今井町重要伝統的建造物群保存地区、八木町 など

重点エリア2：医大新駅周辺エリア
- 医大新駅を中心としたエリア

他主要施設
- 県立新アリーナを含む新駅周辺開発計画
- 奈良県立医科大新キャンパス、医大病院
- 万葉ホール など

重点エリア3：橿原神宮前駅周辺エリア
- 橿原神宮前駅を中心としたエリア

他主要施設
- 橿原神宮（参道も含む）
- 橿原公苑 など

まちなか戦略 2 多様な「にぎわいの杜」づくり

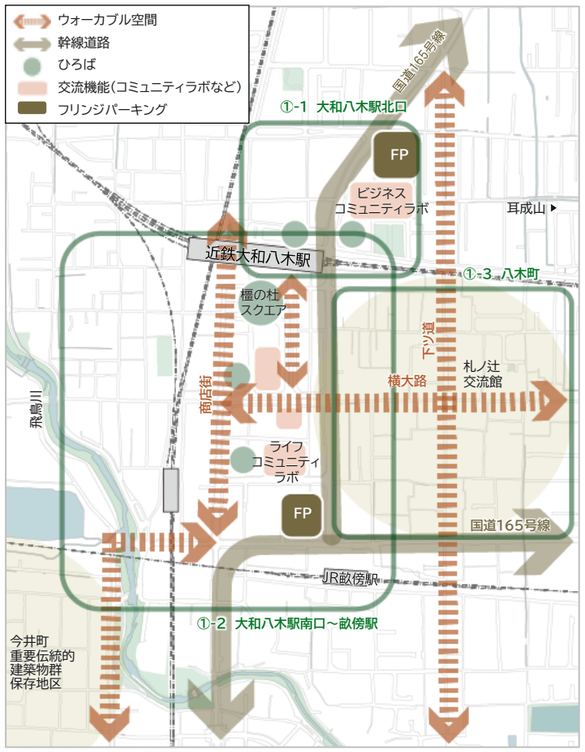
重点エリア 1 大和八木駅・畝傍駅周辺エリア

エリアの現状認識と課題

- 駅徒歩圏内に、八木町、今井町、畝傍駅、耳成山など歴史的資源を有するエリア。
- エリアを縦断・横断する国道により、エリア全体の回遊性が損なわれています。
- 駅北側には築40年超の文化会館や市営駐車場、百貨店などが立地しています。
- 大和八木駅南口は、目的地となる魅力的なスポットが不足していると共に、駅から市役所までの連続性のある歩行者空間が形成されていません。
- 八木町は、歴史的な町屋が現存する一方で、新しい住宅も点在し、ターミナル駅に近い新旧が混在するエリアです。

【本市の不変的価値】 歴史 自然 文化 × 【エリアの特性】 ターミナル駅・まちの中心 × 【新しい魅力】 職 住 交流 商 遊 ▶ 大和八木駅・畝傍駅周辺エリアでつくる **にぎわいの杜**

- エリア内を縦断・横断する国道とは別に、人中心のウォーカブルな空間を形成すると共に、駅前に点在する駐車場を再配置して、ひろばの整備や交流機能の強化を行います。
- 市民と観光客・暮らしとにぎわいが交わる、高密度でミクストユースなまちを目指します。



まちづくり検討例

①-1 大和八木駅北口

- 橿原文化会館用地の将来利活用
- 市営駐車場の再配置・広場化
- 「橿の杜ビジネスコミュニティ・ラボ」
  コワーキングスペース、プロジェクトルーム、大学サテライトキャンパスなど
- 高密度なまちを目指す土地高度利用の検討
- まちづくり勉強会の立ち上げ　など

①-2 大和八木駅南口～畝傍駅

- 八木駅前商店街の歩行者空間を延伸
- 既存公共施設の機能更新・集約
- 多様なイベントができる「橿の杜スクエア」
- 「橿の杜ライフコミュニティ・ラボ」
  図書館、子育て支援、健康スタジオ、災害時避難スペースなど
- 駅～交流機能・JR畝傍駅の歩行者通路を、魅力的で快適な空間へ再整備　など

①-3 八木町

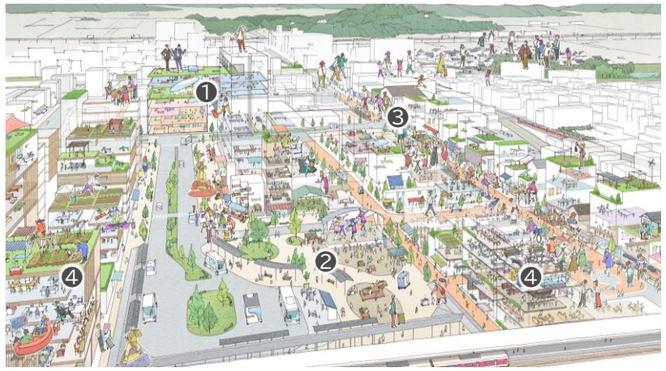
- 橿原の魅力を高める都市機能を導入
  まちまるごと旅館・町屋レストランなど
- 歴史的まちなみ再生地区の設定とまちなみ形成ガイドラインの作成　など
  横大路・下ツ道の再整備、町屋改修コンバージョンなど

30年後のイメージ

駅からにぎわいが伸びる大和八木駅南口

観光客にとっての玄関口となると共に、市民が日常的に集う駅前の広場では、多様なイベントが開催されます。図書館や子育て支援などの交流機能をもつ施設（コミュニティラボ）や今井町に至る歩行者空間には、路面店や用途混在した建物が並び、歩いて楽しいウォーカブルな空間となります。

❶交流機能（コミュニティラボ・公共施設）の配置
❷駅前イベント広場　❸歩行者空間の延伸
❹職・住・遊ミクストユースなまち



小さな店や旅館の風情ある街並みが生まれる八木町

現代的な建物と、歴史的なまちなみ景観が調和するまちづくりの検討を行います。市民の暮らしの場であるだけでなく、まちまるごと旅館やローカルビジネスの路面店などが点在し、住民・観光客がそぞろ歩きをする光景が日常になります。

❶まちまるごと旅館　❷町屋レストラン
❸ローカルビジネスの路面店
❹駅近の居住環境の整備（集合住宅など）
❺歴史的まちなみ形成ガイドラインの作成
（縦格子、軒先ラインの統一、街灯など）

多様な「にぎわいの杜」づくり

重点エリア2 医大新駅周辺エリア

エリアの現状認識と課題

- 医大新駅の新設、新アリーナ建設が予定されています。
- 奈良県立医科大学の新キャンパスが整備され、奈良県立医科大学附属病院も含めたまちづくり連携が期待されます。
- 医大新駅東口は藤原宮跡へのゲートウェイとなり得るポテンシャルを持っています。
- 神武天皇陵や飛鳥川・高取川などの歴史・自然資源に近接しています。
- 医大新駅近郊で複数の開発が計画されているため、全体でまとまりのある将来構想が求められています。

【本市の不変的価値】
歴史 自然 文化

×

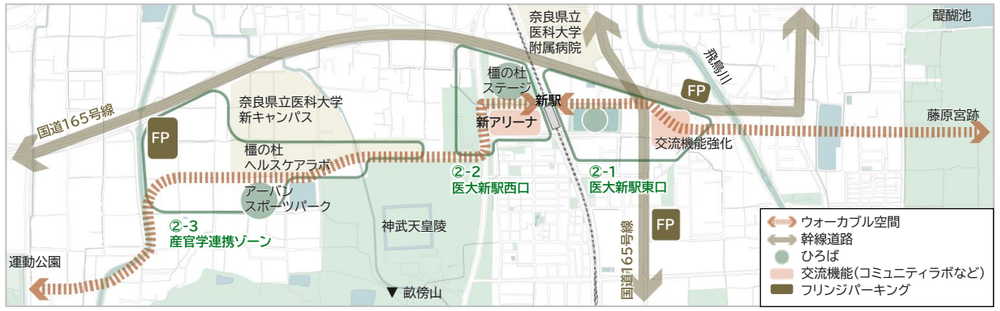
【エリアの特性】
県立医大病院キャンパス・藤原宮跡など歴史散策へのゲート

×

【新しい魅力】
スポーツ 健康 医療

▶ 医大新駅周辺エリアでつくる **にぎわいの杜**

- 橿原運動公園～県立医大新キャンパス～医大新駅～藤原宮跡をつなぐ東西の歩行者空間と、飛鳥川・高取川の水辺を活用することで、健康・スポーツと、歴史・自然が融合したこれからの橿原を象徴するエリアとします。



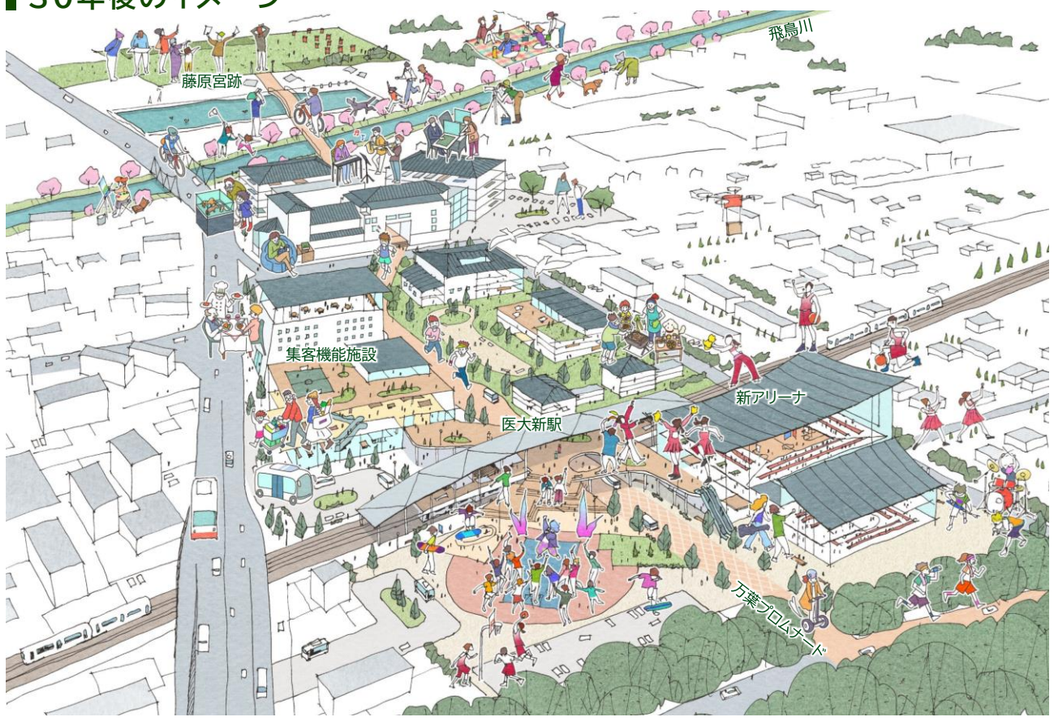
まちづくり検討例

②-1 医大新駅東口
- 万葉ホール・中央体育館など公共施設の一体的な交流機能の強化
- 藤原宮跡のゲートウェイにふさわしいにぎわい機能を導入＋藤原宮跡まで続くプロムナードの整備
  ガイダンスセンター
  大和三山パノラマ展望テラスなど
- 歴史を学び、体験できる展示施設・集客機能施設の導入
- 飛鳥川の護岸整備と、魅力的な親水空間の整備　など

②-2 医大新駅西口
- 2031年の国スポ・パラスポに向けた新アリーナ・広場の事業者募集にあたり、全体まちづくりとの調整
- 橿原公苑まで続く緑道の入り口に、日常的にスポーツに触れる広場(例：健康遊具・ランニングステーション)を整備
- アリーナと連動して屋外でスポーツや音楽を屋外劇場体験する「橿の杜ステージ」　など

②-3 産官学連携ゾーン
- 周辺整備事業者とまちづくり方針の調整
- 神武天皇陵や畝傍山など周辺環境にふさわしい一体的な土地利用へ誘導
- 「橿の杜ヘルスケア・ラボ」
  MBT医工連携イノベーションキャンパス、スポーツサイエンスリハビリセンター、予防医学クリニックプロジェクトルームなど
- 市民の運動が日常になる「アーバンスポーツパーク」
- スポーツコミッションを核としたスポーツ観光の実施　など

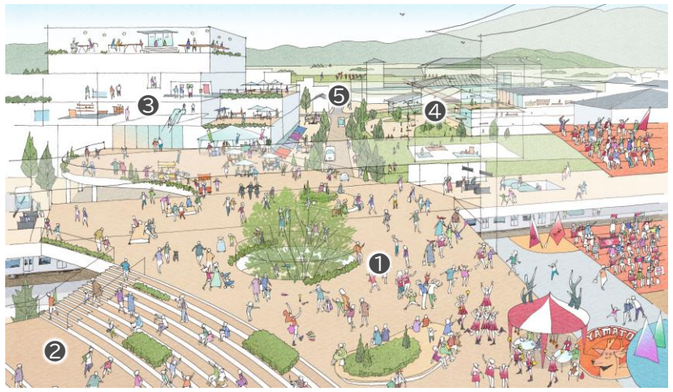
30年後のイメージ



歴史とスポーツが交錯する医大新駅駅前

医大新駅西口では、アリーナや広場で市民が日常的にスポーツと触れあう光景が見られるようになります。東口では、藤原宮跡まで伸びる万葉プロムナード沿いににぎわい機能が集積し、藤原宮跡のゲートウェイにふさわしい駅前空間が形成されています。

❶新アリーナによる駅前のにぎわい
❷駅前ひろばと一体的な大階段
❸集客機能施設の開発
❹交流機能(コミュニティラボ・公共施設)配置
❺藤原宮跡まで続くプロムナード



健康・暮らしの未来を創るプロムナード

アリーナと運動公園をつなぐ動線ネットワークが形成された医大キャンパス周辺では、新しいモビリティの実験・ランニングコースの設定など、多様な道路の使い方が実現しています。沿道では、医大の先進技術を活用したイノベーションの創発・市民の日常的な運動が行われています。

❶外観デザイン統一 ❷医大連携ヘルスケアラボ
❸アーバンスポーツパーク
❹運動公園まで続くプロムナード

まちなか戦略2 多様な「にぎわいの杜」づくり

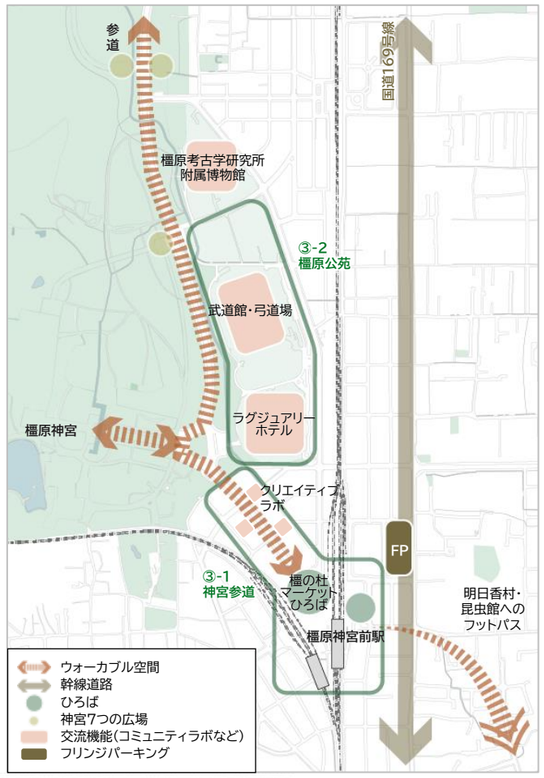
重点エリア3 橿原神宮前駅周辺エリア

エリアの現状認識と課題

- 初詣でにぎわう橿原神宮の玄関口ですが、神宮参道に路面店舗の連続性はなく、通年集客はできていない状況から、新たなにぎわいの創出が望まれます。
- スポーツ施設の新設・集約に伴い、橿原公苑は都市機能の更新が求められています。
- 「日本の道百選」に選ばれた心地よい緑道空間や、神宮参拝者を迎える迎賓空間など唯一無二のエリアの特性を活かしきれておらず、この場所特有の新たな魅力の導入が必要です。
- 吉野・飛鳥エリアとの距離が近く、連携強化が求められる場所です。

【本市の不変的価値】 歴史 自然 文化 × 【エリアの特性】 神宮の森厳な杜 飛鳥へのゲート × 【新しい魅力】 芸術 食 農 ▶ 橿原神宮前駅エリアでつくる にぎわいの杜

- 橿原神宮の通年集客につながる、橿原の魅力を広く発信するアプローチ空間を目指します。
- 吉野・飛鳥エリアへの広域観光のスタート地点となります。



まちづくり検討例

③-1 橿原神宮前駅・神宮参道

- 駅前に、情報発信の拠点となる立ち寄り施設と、観光客を迎え入れるひろばの設置
- モビリティポートを整備し、飛鳥方面に広がる歴史的観光資源へのスタート地点となる環境整備
- 駅から橿原神宮へ至る参道における、街路樹や舗装の整備・路面用途の誘導など、本エリアのデザインガイドラインの作成
- 車両の流入抑制のための、歩道の拡幅
- 参道沿いに作品が並ぶ、巡りたくなるアートストリートの形成
- 「橿の杜クリエイティブ・ラボ」
  アーティスト・イン・レジデンス、チャレンジマーケット、地産地消レストラン、料理学校、デザインセンター
- 地産地消マルシェを定期開催し、観光の玄関口となる「橿の杜マーケットひろば」　など

③-2 橿原公苑

- 橿原市・明日香村に訪れる国内外のVIPに対応するラグジュアリーホテルの誘致
- 観光機能の新規導入　など

30年後のイメージ

1年を通してにぎわう 橿原神宮参道

神宮参道は、歩道の拡幅など歩いて楽しい環境に整備され、沿道には地産地消の飲食店・アートギャラリー・お土産店など、観光客の立ち寄り施設が並びます。

多くの観光客が1年を通して訪れ、ここを起点に、吉野・飛鳥エリアへ繰り出します。

❶散策が楽しくなる参道の1車線化
❷デザインガイドラインの作成
❸ストリートアート・ギャラリーの集積
❹観光客の立ち寄り拠点施設

長野県長野市：中央通り・善光寺参道

- 長野駅～善光寺を結ぶ約1.4kmの道であり、市の景観・観光・文化を象徴する場所です。
- 歩道空間を拡幅し、植栽帯やベンチの整理、街並み環境整備事業により、連続性と景観向上を目指しました。定期的に歩行者天国も実施しています。

出典:国土交通省HP

福岡県太宰府市：太宰府天満宮参道

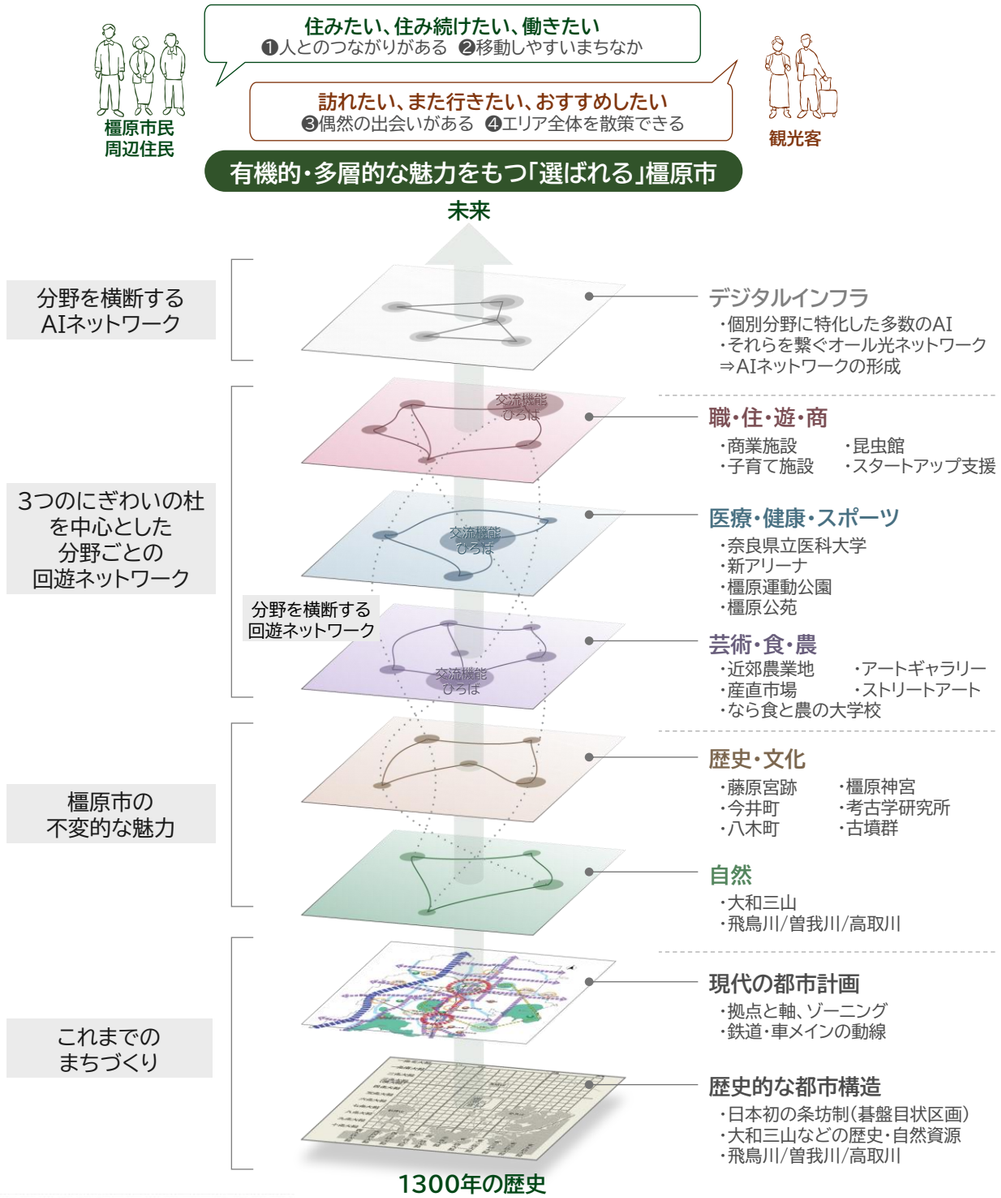
- 太宰府駅～太宰府天満宮を結ぶ約400mの道であり、繁忙期に限らず歩行者専用道路として運用されています。
- 太宰府市による景観形成ガイドラインの制定や、文化発信によるブランド強化が行われています。ガイドラインに基づきながら、新しいデザインの店舗の出店も進んでいます。

出典：太宰府観光協会HP

まちなか戦略 3 杜と杜をつなぐ有機的・多層的なネットワークづくり

有機的・多層的な都市構造の構築

- 現状の都市構造及び不変的な魅力に、3つのにぎわいの杜を中心とした分野ごとの回遊ネットワークを重ね、さらに分野を横断した回遊ネットワークを形成することで、有機的・多層的なネットワークを構築します。そして、各分野に特化した多数の小規模AIがネットワークを形成し、連携することで、都市のさらなる魅力向上につながり、市民や周辺住民、観光客にとって「選ばれる」まちとなることを目指します。
- 市民にとっては、❶人とのつながり（地域コミュニティ）があり、❷目的に応じて移動しやすいまちなかとなり、観光客にとっては、❸偶然の出会いがあり、❹エリア全体を散策として楽しむことができる、市民と観光客が共存しやすいまちとなります。



ウォーカブル+が拡大する回遊ネットワーク

- 3つの重点エリア内のウォーカブル化を進めると共に、「DX/デジタルサービス」と「Mobility」を充実させることで、まちなか戦略エリア内、さらにその外側まで広がる回遊ネットワークを形成します。

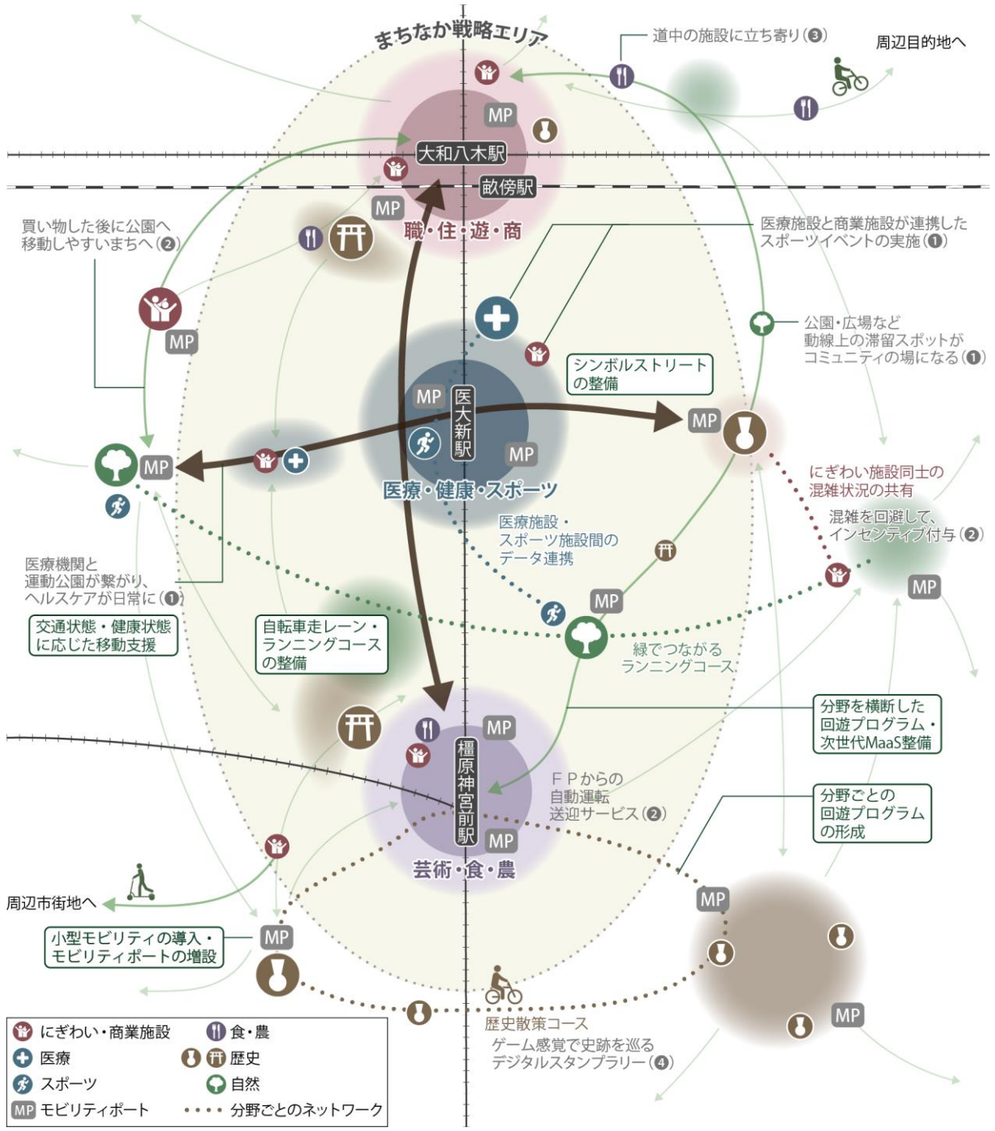
Walkable
- 3つの重点エリア内のウォーカブル化
- シンボルとなるストリート・水辺空間の整備
- エリアをつなぐ緑陰空間の整備
- ランニングコースの設定
- フリンジ駐車場の設置による車両の流入抑制

など

＋

DX/デジタルサービス
- 市民と観光客が楽しく回遊できるプログラムの形成
- 交通状態・健康状態に応じた移動支援 など

Mobility
- モビリティポートの増設や小型モビリティの導入
- 複数の移動手段と体験回遊の誘導レコメンドを組み合わせた次世代観光MaaS など



まちなか戦略 3 杜と杜をつなぐ有機的・多層的なネットワークづくり

分野を横断する回遊ネットワーク 「ランブリング・プロムナード」

市民にとっては、日常的にまち歩き・スポーツや軽運動を楽しむ場となり、
観光客にとっては、本市の歴史や自然を巡るフットパスとなる、4つのプロムナードを形成します。

4つのプロムナードの整備イメージ

万葉プロムナード（東西）

- 運動公園～奈良県立医大新キャンパス・病院と新駅～藤原宮跡を貫く東西のプロムナードを形成します。
- 医療・スポーツと歴史資源が、新駅を中心に交錯することで、本市の新たなにぎわい動線になります。
- 緑陰を生む橿の並木の植樹を行い、緑豊かな散策路を生み出します。

飛鳥川・曽我川・高取川の水辺プロムナード

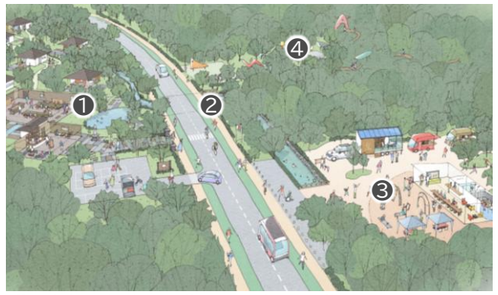
- 飛鳥時代から存在する飛鳥川・曽我川・高取川の原風景を回復・再興すると共に、護岸整備を行うことで、災害にも強い豊かな水辺空間を形成します。

札の辻で交差する2本の古道の再生

- 江戸時代からの街並みが残る八木町で交わる横大路と下ツ道を再生し、本市の誇る歴史や文化が感じられる印象的な通りを形成します。

橿の杜プロムナード（南北）

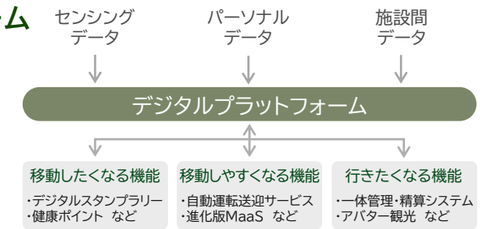
- かつて橿原神宮内の参拝道路に整備された7つの広場と橿の並木で構成される緑道空間の再整備を行います。
- 今井町～神武天皇陵の歩道を美装化することで、3つの重点エリアをつなぐ南北のプロムナードを形成します。



❶ラグジュアリーホテル ❷ランニングコース ❸ランニングステーション
❹沿道を彩るパブリックアート

回遊を促進するデジタルプラットフォーム

AI連携ネットワークを備えたデジタルインフラが、本市独自のデジタルサービスや多様なモビリティと連携することで、市域全体の回遊を促進する“デジタルプラットフォーム”を構築します。



① “移動したくなる”ための機能例

- ゲーム感覚でまちなかスポットを巡るデジタルスタンプラリー
- 施設間データ連携により混雑を緩和、回避した人に対するインセンティブ付与
- 市民一人一人のヘルスケア（ウォーキング・健康遊具の利用）による発電・健康ポイント
- 医療カルテと連動し、パーソナルな健康データとスポーツ行動へ誘引するヘルスケアアプリ

② “移動しやすくなる”ための機能例

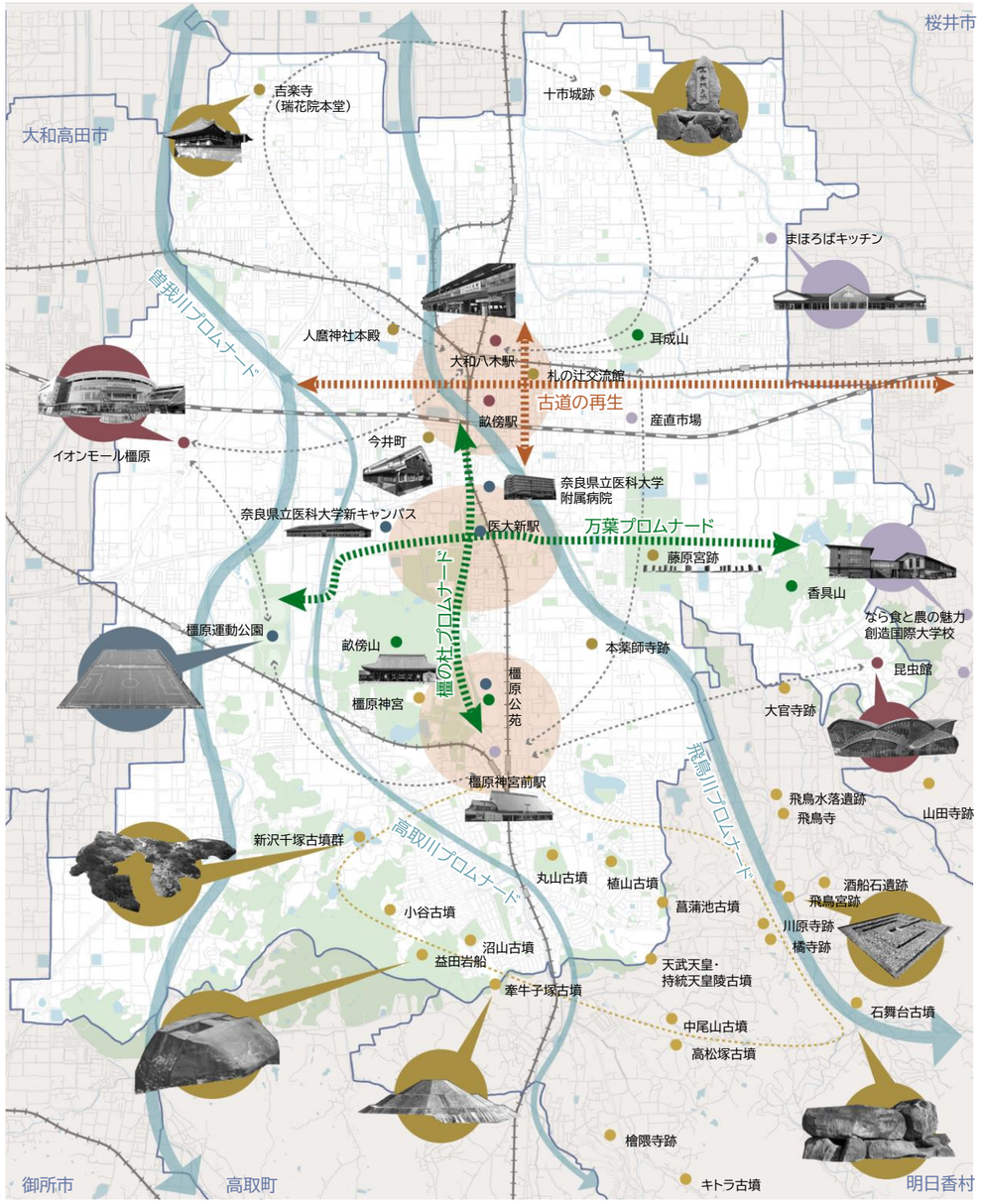
- EaaS（Experience as a Service）：移動経路や観光施設の予約と合わせて、今しかできない体験（月ごとの夕日スポットなど）をリコメンドするMaaSの進化版
- スマートフリンジパーキング：フリンジ駐車場から自動運転による送迎サービス
- リアルタイムでの交通量に応じた信号制御・回避ルートの自動調整
- 健康状態に応じたモビリティによる医療・介護施設への通院・移動支援

③ “行きたくなる”ための機能例

- 生体認証による、チケット購入・決済・入場・宿泊などの一体管理・精算システム
- 好きな場所で好きな時間にイベントや商いをすることができる、未利用地のシェアリング
- ゲーム技術を活用したAR観光体験、現地に行かずとも橿原の魅力をVR体験できるアバター観光

広域回遊ネットワーク連携

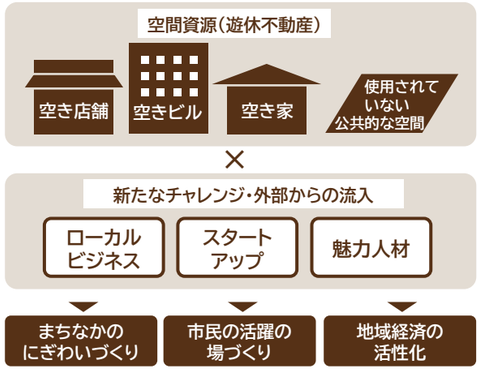
- ウォーカブルな3つの重点エリア（大和八木駅・畝傍駅周辺エリア/医大新駅周辺エリア/橿原神宮前駅周辺エリア）を中心に、4つのプロムナード（万葉プロムナード/橿の杜プロムナード/水辺プロムナード/古道の再生）が結びつき、さらにデジタルプラットフォームの構築によって、分野を横断した連携が可能になります。ハードインフラとデジタルインフラの双方を充実させることで、橿原市内だけに留まらず、本市が回遊の中心となるような3市村に跨がる広域回遊ネットワークを形成します。
- 駅まちウォーカブルエリアの外にあるにぎわい拠点や、桜井市と明日香村などの世界遺産群、近郊農業地にみられる日本のふるさとの風景を、市民から観光客まで誰もが自由に巡ることができます。



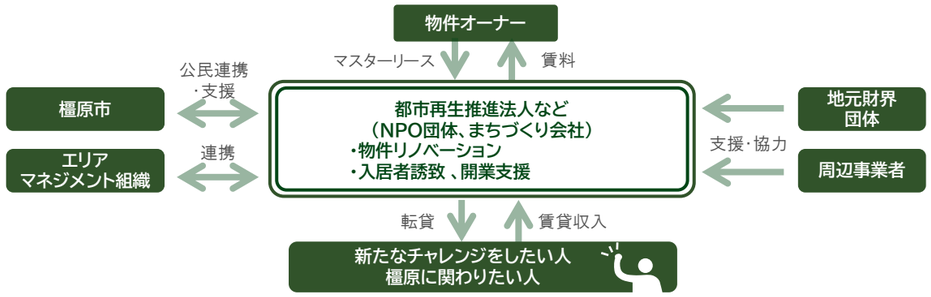
まちなか戦略 4 「橿の杜」を持続的に成長させるエコシステムづくり

市民の活躍の場づくり

- 今後人口減少と共に増える遊休不動産（空き店舗や空き家、空きオフィスなど）を、新たなチャレンジを始めたい人や外部から流入する魅力人材の活躍の場として再生・活用していきます。
- リノベーションまちづくりなど、エリア内で複数同時に再生・再整備し、それらを連携させることで、新たな雇用や産業を創出するだけでなく、エリア全体の魅力と価値を高め、地域を活性化させます。
- 周辺住民も観光客も含めた多様な人々が訪れ、にぎわいを生み、新たな発見と共に交流を誘発するまちなかを目指します。



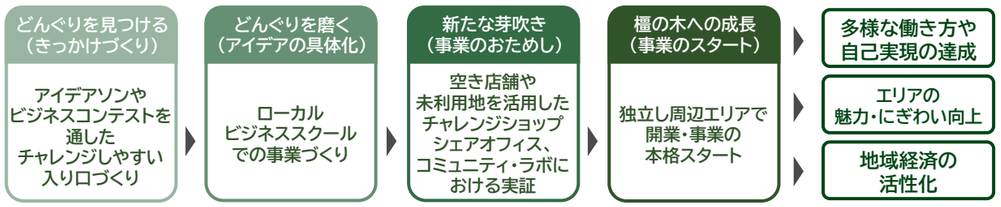
スキームイメージ



新たな活動や価値を生み出す仕組みづくり みらいを創るどんぐりプロジェクト

- 多様な働く場の創出や地域経済の活性化、まちなかの生活の質向上につながる、スタートアップやローカルビジネスの創出を推進します。

スタートアップ・ローカルビジネス創出イメージ



① スタートアップやローカルビジネスが生まれるきっかけづくり

- 新しい人材や産業、サービスを生み出すきっかけとして、アイデアソン※やビジネスコンテストなどのプログラムを実施します。優秀案に選ばれると、本格的に実現に向けた支援が受けられるなど、チャレンジしやすい入り口づくりをします。

※アイデアソン　…「アイデア（Idea）」と「マラソン（Marathon）」を掛け合わせた造語。特定のテーマについて多様なメンバーが集中的に議論し、限られた時間でアイデアを出し合うワークショップ型のイベント

② 新たなアイデアが生み出される・アイデアの具体化

- マッチングコンシェルジュ（ニーズ×シーズ）やプロジェクトの共創空間、ローカルビジネススクールなどで、事業アイデアを膨らませ、多様な主体と意見交換をすることで事業をブラッシュアップします。

③ チャレンジしやすい場づくり・ 実証の場づくり

- にぎわい拠点やひろば、空き家などを活用し、設備が備えられていることで始めやすいシェアオフィスやチャレンジショップ、職住融合店舗などをつくります。また、新たなサービス・商品の開発時には各拠点のコミュニティ・ラボを通じての実証が可能です。

④ 独立の支援

- 一定期間の試験的な事業実証ののち、周辺エリアにおける独立を支援します。エリアの魅力・にぎわい向上、地域の経済活性化につながります。
- 地域密着型の事業やまちの魅力向上に寄与する取組みには、まちづくりファンド※や、ソーシャルインパクトボンド※などを活用し、活動を支援する仕組みづくりを行います。

※まちづくりファンド　…地域の資金を地縁によって調達し、景観形成・観光振興など、住民主体のまちづくり活動やまちづくり会社への支援を目的とする仕組み。
※ソーシャルインパクトボンド…民間資金で優れた社会事業を実施し、事前に合意した成果が達成された場合、行政が成功報酬を支払う仕組み。

島根県雲南市の事例 ： ソーシャルチャレンジ 「チャレンジの連鎖が地域の未来をつくる」

- 雲南ソーシャルチャレンジバレーは、高齢化が著しい雲南市が課題解決を目指しスタートさせた地方創生プロジェクトです。
- 地域を担う多様な人材を育成・確保することを目的として「大人チャレンジ」、「若者チャレンジ」、「子どもチャレンジ」とそれぞれのステージで、多世代・多様なチャレンジの連鎖を生むための一連の施策に加え、さらなるインパクトを求めて都市部企業による課題解決のチャレンジ「企業チャレンジ」を掛け合わせ、全プレーヤーによるソーシャルチャレンジの生態系を作り出そうとしています。

出典：雲南市HP

橿原市のスタートアップ・ローカルビジネス創出のイメージ

地域資源 地域課題	×	社会の潮流	→	スタートアップ ローカルビジネス
奈良県立医科大学の医療技術	×	デジタル技術の革新	→	遠隔治療・遠隔手術の実現
スポーツ・健康 × 医療技術	×	デジタル技術の革新	→	24時間のリハビリや予防医学の遠隔診療
歴史文化	×	サステナブル	→	歴史資産の修復作業を通じた体験型ツーリズム
橿原市の伝統文化「挽き茶」	×	ウェルビーイング	→	茶道ウェルネスツーリズム
農業6次産業化	×	サステナブル	→	農家と消費者のマッチングプラットフォーム
農業	×	サステナブル	→	循環型アグリテックの開発（土壌や品種の開発、自動化など）
藤原宮跡	×	デジタル技術の革新	→	藤原宮を舞台にしたAR体験
武道・弓道	×	デジタル	→	e-道（eスポーツ版の武道）コンテンツ開発　など

まちなか戦略 4 「橿の杜」を持続的に成長させるエコシステムづくり

新たな魅力人材の呼び込み・育成による橿原市のさらなる活性化

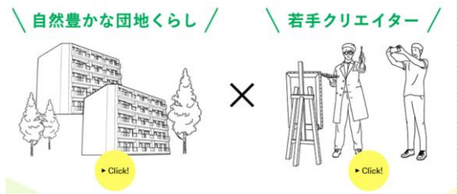
地域の創造性を高める魅力人材の呼び込み

- まちの新たな資源を生み出し、新しい取組み・事業につながるクリエイティブワーカーや、アーティスト、デジタル人材、その他本市に必要な業種の人材誘致を検討します。
- 移住先や二拠点居住先、創作の場と想定して遊休不動産をリノベーションしたり、設備投資を実施したりするなどして人を呼び込み、地域の能動的なデザインを推進します。
- 例：デザイナー、ゲームクリエーター、デジタル人材、AR技術者、建築家・まちづくり、食と農の起業家やシェフ、メディア、家具クラフト職人、醸造家、スポーツメディカルドクター、歴史エッセイスト、プロダクトデザイナーなど

大阪府堺市の事例 ：
大阪府住宅供給公社による
「来たれクリエイター！プロジェクト」

- 「ルームシェア」がテーマの2戸を1戸に繋げる団地リノベーション「ニコイチ」に、若手クリエイターのグループ1組が住みながら創作活動を行います。
- 公社が3年間の家賃の減額や創作活動の発表の場を提供することで、クリエイターが団地というフィールドにおいて自らの活動を発信し、将来に飛躍することを応援します。

※但し、令和5年3月で取組みは終了



出典：大阪府住宅供給公社HP・リリース資料

徳島県神山町の事例 ：
NPO法人グリーンバレーによる
移住希望者のマッチング

- 過疎化の現状を受け入れ、外部から若者やクリエイティブな人材を誘致することによって「人口構成の健全化」を図るとともに、多様な働き方が可能な「ビジネスの場」としての価値を高め、農林業だけに頼らない、バランスの取れた、持続可能な地域を実現しています。
- 「ワーク・イン・レジデンス」という考え方で、町の将来に必要と考えられる「働き手」「起業家」を逆指名するというユニークなマッチング方法を導入しています。

出典：内閣府「選択する未来」委員会資料

新たな「活動人口」の創造、人材の育成

- 「活動人口」とは地域に対する誇りや自負心を持ち、地域づくりにいきいきと参加する人を指します。今後持続的にまちを発展させていくうえでは、まちの課題を自分ごと化し、主体的に活動を推進できる人材が必要不可欠です。歴史や自然、文化などの本市の魅力を生かし、これから起こる地域課題に対応する多様な分野の専門人材を育成します。
- 観光分野においては、世界遺産としてのブランドを最大限に活かして、地域産業の活性化や観光魅力向上につながる、観光人材の育成に取組みます。2023年から始まったプロガイド養成の取組みを継続し、市民の発信の場や観光を軸とした地域活性を進めます。その他、観光庁が提供する「観光人材育成事業」の活用や、大学との連携などにより、橿原ならではの観光企画・多様なステークホルダーの連携を支援する専門知識を有するコーディネーターなど、観光への多様な関わり方ができる仕組みづくりが考えられます。
- その他、公共施設の利活用や広場空間の利活用、農や食の本市ならではの魅力発信、スポーツの集積を生かした専門人材や医療連携分野の人材などを育成し、将来のまちの活性化につなげていきます。

橿原市の「人」の魅力の発信

橿原の「人」の魅力・活動にフォーカスした、人と人をつなぐ地域の魅力化・体験型観光

- 本市で生まれる魅力的な取組みや、まちへの愛着を持って活動をする人々の活動の発信を推進します。ウェブページやSNS、紙面など、市民だけでなく遠方からの観光客にも共有可能な発信媒体を用いて、幅広い層へアプローチします。
- 市民にとっては、さらにまちへの愛着を深め、新たな出会いや新たな事業チャンスの発見など、暮らしを豊かにするコンテンツとなり、観光客・来街者に向けては、橿原での営みや魅力に触れることができる、体験型観光の提供につながります。

長崎県雲仙市の事例：OBAMA MEETUP GUIDE

- 単なる観光スポット巡りではなく、そこに住む人々の営みや文化に触れ、交流を目的とした小浜温泉街に暮らす「人」にフォーカスしたマップです。
- 「人」をめぐるガイドツアーOBAMA MEETUP TOURなども企画されています。

出典：一般社団法人OBAMA ST．HP

4. 選ばれるまち橿原

4. 橿原市まちづくりグランドデザイン素案

4　選ばれるまち 橿原

社会情勢【p1-2】 / まちづくりのトレンド【p3-4】
橿原市の歴史・文化・地勢【p5-8】 / 橿原市の現況と課題【p10-12】
橿原市の上位計画【p13-15】 / 市内のまちづくり【p16】

橿原市が目指すまちのすがた

ウェルビーイング　サステナブル

住みたい 住み続けたい

- 外に出たくなるウォーカブルなまち
- 自然や文化が感じられるまち
- 地域コミュニティとつながるまち
- 一人一人の意見が尊重されるまち
- 誰もが安心して暮らせるまち（防犯）
- 医療環境が整っているまち
- 子育て・教育環境が整っているまち
- 災害につよいまち
- 緑豊かな環境にやさしいまち
- その土地らしさが息づくまち
- 関係人口が増え続けるまち

など

働きたい

- 新しいことにチャレンジできるまち
- ビジネスコミュニティとつながれるまち
- 仕事の前後も快適に過ごせるまち
- 働き方が自由に選べるまち
- 地域内で経済活動が循環するまち
- 人・企業との出会いが広がるまち
- チャレンジする人を応援するまち

など

訪れたい

- ここでしかできない体験があるまち
- 地域の人ととの関わりがもてるまち
- 自然や文化が感じられるまち
- 安全・安心に過ごせるまち（言語）
- 目的に応じて移動しやすいまち
- 偶然の出会いがあるまち
- その土地らしさが息づくまち
- ホスピタリティのあるまち

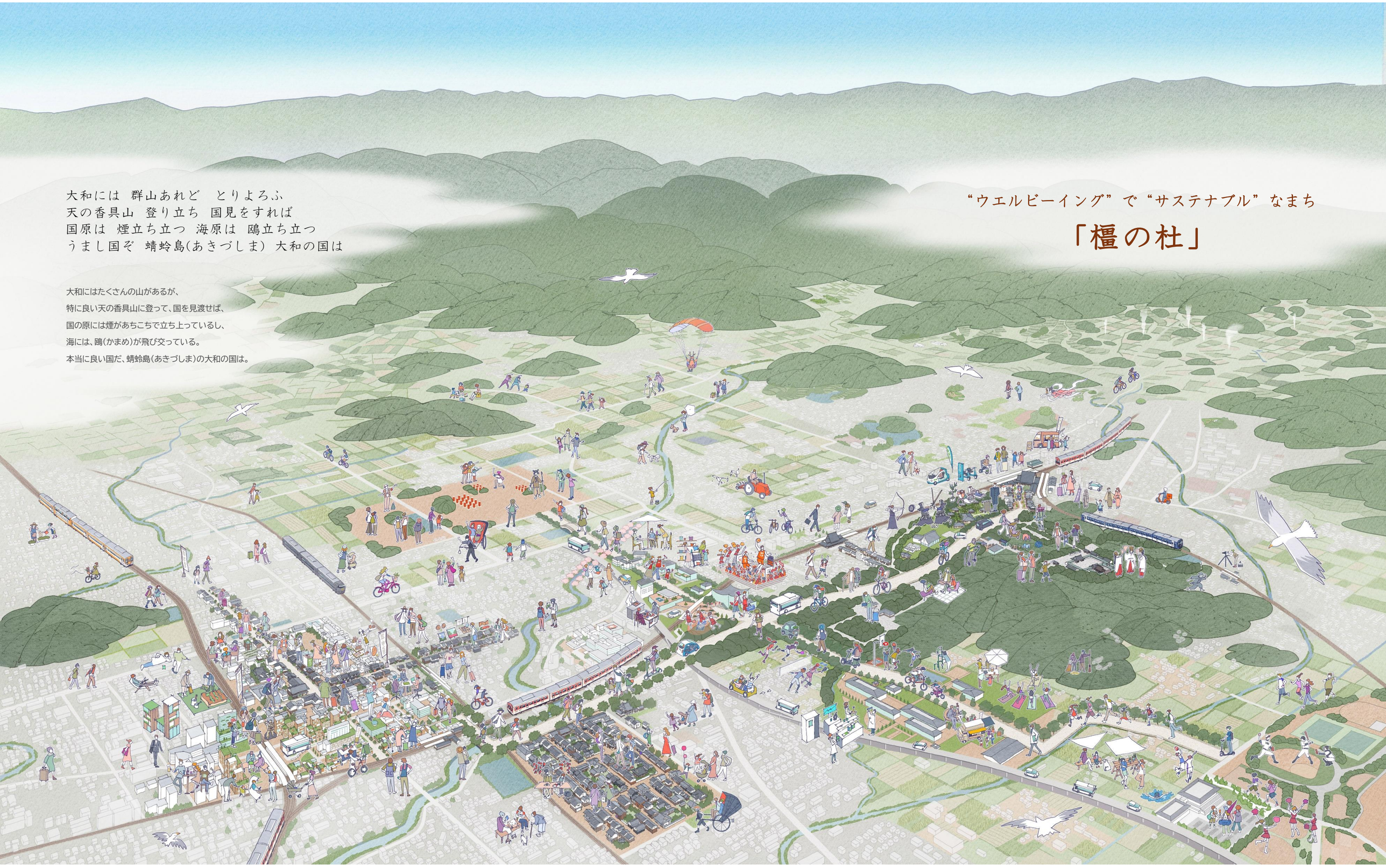
など

具体的な展開例

- コンセプトブックやムービー、SNSなどを活用した周知活動 【戦略1 / p25】
- 「橿原まちなか戦略エリアマネジメント」の組織化（公民連携の体制づくり）【戦略1 / p25】
- 市民の主体性を育むワークショップ等の実施 【戦略1 / p26】
- デジタルプラットフォームを用いた市⇔市民のコミュニケーション 【戦略1 / p26】
- 社会実験や市民参画イベントの実施、メタバースなどを活用したまちづくりの試行 【戦略1 / p26】
- 「駅まちウォーカブルエリア（3つの重点エリア）」の設定 【戦略2 / p28】
- まちづくりとコミュニティの交流拠点となる「コミュニティ・ラボ」と駅前ひろばの設置 【戦略2 / p27.29.33】
  「橿の杜ライフコミュニティラボ」 図書館、子育て支援、多世代交流、ジム、災害時避難スペースなど
  「橿の杜クリエイティブラボ」 アーティスト・イン・レジデンス、チャレンジマーケット、料理学校、デザインセンターなど
- 市民の運動が日常になる「アーバンスポーツパーク」【戦略2 / p32】
- 自転車レーンやランニングコースの設定 【戦略3 / p36】
- 分野を横断する回遊ネットワーク「ランブリング・プロムナード」【戦略3 / p37】
- 分野ごと＋分野を横断した回遊プログラムの形成 【戦略3 / p36.37】
  まちなかデジタルスタンプラリー、市民一人一人のヘルスケアによる発電・健康ポイント付与、施設感データ連携による混雑回避など
- モビリティポートの増設や小型モビリティの導入 【戦略3 / p37】
- 新たな「活動人口」の創造、人材の育成　専門知識を有するコーディネーター、医療連携分野の人材育成など 【戦略4 / p41】
- 橿原の「人」の魅力・活動にフォーカスした、人と人をつなぐ地域の魅力化 【戦略4 / p42】

- まちづくりとコミュニティの交流拠点となる「コミュニティ・ラボ」の設置 【戦略2 / p27.29.31】
  「橿の杜ビジネスコミュニティラボ」 コワーキングスペース、プロジェクトルーム、大学サテライトキャンパスなど
  「橿の杜ヘルスケア・ラボ」 医工連携イノベーションキャンパス、スポーツサイエンスリハビリセンター、予防医学プロジェクトルームなど
- 職・住・遊がフレキシブルに組み込まれた、高密度でミクストユースなまち 【戦略2 / p29】
- 遊休不動産を、魅力人材の活躍の場として再生・活用 【戦略4 / p39】
- スタートアップ・ローカルビジネスを創出する「みらいを創るどんぐりプロジェクト」【戦略4 / p39】
- 地域の創造性を高める魅力人材（クリエイティブワーカー、アーティスト、デジタル人材など）の呼び込み 【戦略4 / p41】
- 新たな「活動人口」の創造、人材の育成　専門知識を有するコーディネーター、医療連携分野の人材育成など 【戦略4 / p42】

- コンセプトブックやムービー、SNSなどを活用した周知活動 【戦略1 / p25】
- 八木町における、新しい建物（集合住宅・宿泊施設など）と歴史的なまちなみが調和するまちづくり 【戦略2 / p30】
- スポーツコミッションを核としたスポーツ観光の実施 【戦略2 / p31】
- 神宮参道における、歩道の拡幅・デザインガイドラインの作成・パブリックアートの設置など 【戦略2 / p33】
- 橿原公苑などへのラグジュアリーホテルの誘致 【戦略2 / p33】
- 橿原の食文化・ローカルビジネスを広く発信する、観光客の立ち寄り拠点施設の整備 【戦略2 / p33】
- 分野ごと＋分野を横断した回遊プログラムの形成 【戦略3 / p36】
- モビリティポートの増設や小型モビリティの導入 【戦略3 / p37】
- 複数の移動手段と体験回遊の誘導レコメンドを組み合わせた、次世代観光MaaS 【戦略3 / p37】
- 分野を横断する回遊ネットワーク「ランブリング・プロムナード」【戦略3 / p37】
- 回遊を促進するデジタルプラットフォーム 【戦略3 / p37】　生体認証による一体管理システム、AR観光体験　など
- 橿原の「人」の魅力・活動にフォーカスした、人と人をつなぐ地域の魅力化・体験型観光 【戦略4 / p42】



4. 橿原市まちづくりグランドデザイン素案

資料編　パースの説明

※各パースには、既存の計画の延長線にないものも含まれています。

重点エリア 1　大和八木駅・畝傍駅周辺エリア

❶ 大和八木駅北口・南口の土地高度利用
駅北口では、土地高度利用の検討を進め、高密度でミクストユースな街区の形成を目指します。
低層階には路面店が並び、上層階には職・住・遊の用途がフレキシブルに組み込まれ、屋上では屋上菜園が行われるなど、
多様なライフスタイルに対応したウェルビーイングな暮らしが実現しています。

❷ 大和八木駅北口市営駐車場の広場化
くつろぎの場やイベントの場、また、有事の際の活用など多様な空間を創出します。

❸ 大和八木駅北口の一体的な再開発
橿原文化会館・近鉄百貨店の一体的な再開発を行います。（ホール機能の再配置や、ホテル・商業の開発など）
また、スマートフリンジパーキングを設け、エリア内への自家用車の流入を抑制します。

❹ 歩行者動線の確保
国道により東西で分断されているところを、東西の広場・ペデストリアンデッキ・横断歩道によってつなぎ、ウォーカブルを実現します。

❺ 大和八木駅南口の再整備
駅南口の交通機能を整理し、約半分を広場化することで、観光客にとっての玄関口・市民にとっての集いの場を形成します。

❻ 駅前の駐車場を再配置＋交流機能（コミュニティラボ・公共施設・行政サービスなど）の拡充

❼ 八木町街並み形成ガイドラインの作成・都市機能の導入
八木町では、歴史的な景観を保全するための、デザインガイドラインを作成します。
また、観光客にとっての魅力的な都市機能も誘致することで、ターミナル駅そばの主要な集客地点となります。
統一されたデザインのもと、新旧が混在した魅力的なまちが形成されます。

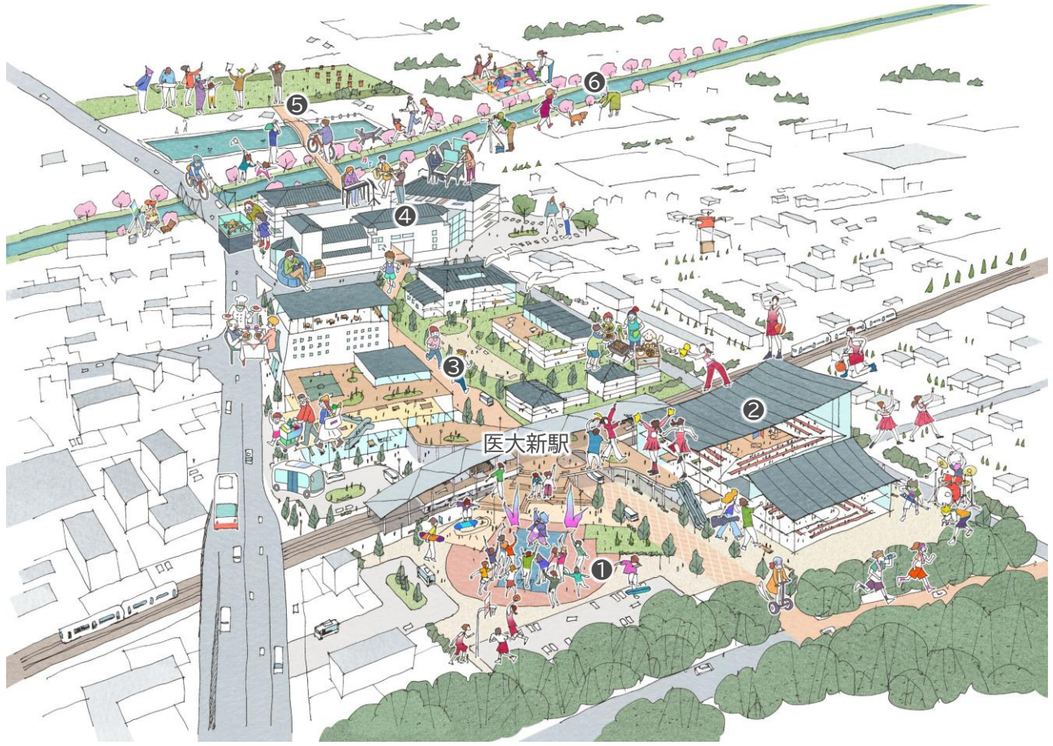
❶多様なイベントが行われる駅前イベント広場　❷図書館機能や子育て機能を複合した交流機能（コミュニティラボ・公共施設）の強化
❸今井町・交流機能施設までの魅力的な歩行者空間の延伸・再整備
❹職・住・遊の用途がフレキシブルに組み込まれたミクストユースな建物　❺屋上菜園

❶八木町まちまるごと旅館（宿泊施設＋レストラン＋銭湯＋カフェ＋土産屋＋雑貨屋など）
❷町屋レストラン
❸ローカルビジネスの路面店（お茶屋・カフェ・酒蔵など）
❹歴史的まちなみ形成ガイドラインの作成 （縦格子、軒先ラインの統一、街灯のデザイン、看板の統一など）
❺新しいローカルビジネスが生まれるラボ

資料編　パースの説明

※各パースには、既存の計画の延長線にないものも含まれています。

重点エリア2　医大新駅周辺エリア



❶ 国スポ・パラスポに向けた新アリーナ整備
バスケの試合や、市民のスポーツ大会、e-sportsの大会、サミット、コンサートなど、多様な利用が想定され、
日常時にも非日常時にも、市民や観光客で賑わう駅前空間となります。

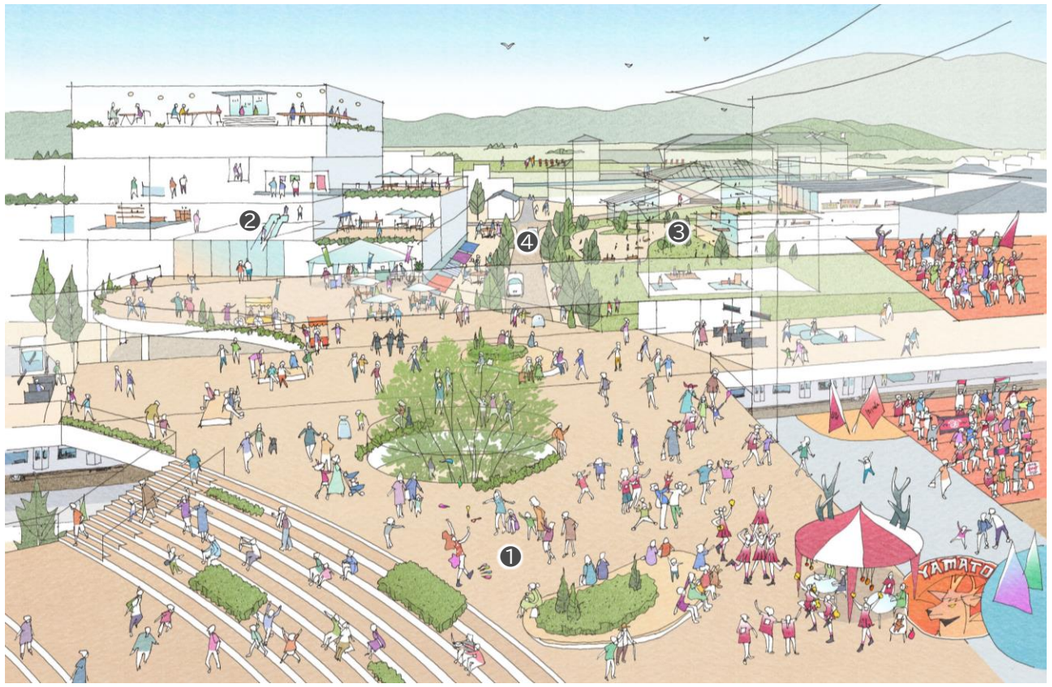
❷ 新アリーナと一体的な利用が可能な広場
アリーナ前の広場では、アリーナで行われるイベントと連携した屋外イベントが行われます。
バスケ試合時には子供達へのバスケ教室、コンサート時にはプレパフォーマンスステージなど。

❸ 民間開発の誘導
藤原宮跡まで続くプロムナードのゲートウェイとなり得るにぎわい施設（ホテル機能など）を誘致するなど、
官民連携による魅力的な機能を集積します。

❹ 交流機能の強化
万葉ホール・市民体育館を一体的に見直し、市民の交流の場となる公共施設を整備します。

❺ 藤原宮跡まで続く万葉プロムナード
医大新駅から藤原宮跡を結ぶ、歩行者・小型モビリティ・シェアモビリティ専用のプロムナードを整備します。
車中心の国道165号線との動線を明確に分けるため、新たに橋を設けるなど、藤原宮跡までまっすぐ続く歩いて楽しい道を形成します。

❻ 魅力的な水辺空間（飛鳥川）の形成
桜の名所にもなっている飛鳥川の河川敷を再整備し、市民に安らぎを与える魅力的な親水空間とします。



❶駅とのデッキ接続によって東西に広がる駅前のにぎわい
❷藤原宮跡へのゲートウェイとなる集客機能施設
❸交流機能（コミュニティラボ・公共施設・行政サービスなど）の配置
❹藤原宮跡まで続くプロムナード

❶外観デザインの統一（医大キャンパスの意匠を継承）
❷医大と連携してイノベーションを創発するヘルスケアラボ
❸市民の運動を日常にするアーバンスポーツパーク
❹橿原運動公園まで続くプロムナード・ランニングコース

資料編　パースの説明

※各パースには、既存の計画の延長線にないものも含まれています。

重点エリア3　橿原神宮前駅周辺エリア

❶ 観光客を受け入れる駅前ひろば
駅を降りて正面にある神宮参道の先に畝傍山を望む駅前ひろばでは、
地産地消マルシェや季節のイベントが定期的に開催され、橿原神宮参道が一年を通してにぎわいを見せます。
観光客の受け皿となる観光案内センターを整備し、インバウンドにも対応した観光地となります。

❷ 魅力的な参道の形成
車道を1車線化して歩行者空間を拡幅すると共に、舗装をフラットに美装化することで、参道を行き来して散策を楽しめる空間となります。
歩道上にはベンチや机が並び、購入したものをその場で食べることも、木陰で休憩することもできます。
また、軒のラインや外壁の色など、統一感を持った通りにするためのデザインガイドラインを作成します。

❸ 沿道沿いの複合観光施設・ポケットパーク
参道沿いのまとまった遊休地に、魅力的な飲食店が集積する複合観光施設を設けます。
地産地消のレストランや、地元で有名なお土産品を集めたマルシェなど、本市の「食」を広く発信する場所となります。
参道沿いには所々にポケットパークを設け、パブリックアートの設置や、アートイベントの開催を行います。

❹ 3つの重点エリアを貫く「橿の杜プロムナード」
医大新駅と橿原神宮をつなぐ緑道には橿の並木が連なり、夏は木陰を作り、冬にも葉を落とさない市民の憩いの場となります。
ランニングコースを整備し、市民が日常的にヘルスケアを行う場にもなります。

❺ 橿の杜プロムナードを彩る7つの広場の再整備
神宮参道にかつて整備された7つの広場を再整備し、ランニングステーションや健康遊具・パブリックアートなどを設置します。

❻ 橿原公苑内へのラグジュアリーホテルの誘致
橿原市・明日香村に訪れる、国内外の観光客を受け入れるラグジュアリーホテルの誘致を検討します。

❼ 飛鳥エリアへの周遊のスタート地点となるモビリティポート
橿原神宮前駅に多様な移動手段を提供するモビリティポートを設置することで、歴史資産を巡る周遊コースのスタート地点となります。

❶散策が楽しくなる参道整備（歩道の拡張・舗装の美装化・車道と歩道のフラット化・ベンチや机の設置など）
❷デザインガイドラインの作成（軒のライン・看板デザイン・外壁の色など）
❸ポケットパークに置かれたパブリックアート・アートギャラリーの集積
❹観光客の立ち寄り拠点施設（入り組んだ路地裏空間に飲食店が並ぶ空間）
❺新しいモビリティ（移動するマルシェ・移動するレストランなど）

❶国内外のVIPを受け入れるラグジュアリーホテル　❷橿の並木の下を走るランニングコース
❸ランニングステーション・健康遊具（7つの広場の再整備）　❹プロムナードを彩るパブリックアート